みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

岡正雄と「ヌナミウト」：明治大学所蔵資料にみるアラスカ調査と新たな岡正雄像

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2023-12-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 碇, 陽子, 柳沼, 亮寿 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/0002000060

国立民族学博物館研究報告 48(1): 85–132 (2023)

資料　Research Resource

岡正雄と「ヌナミウト」
──明治大学所蔵資料にみるアラスカ調査と新たな岡正雄像[1)]──

碇　　陽　子*　・　柳　沼　亮　寿**

Masao Oka and the “Nunamiut”: A New View on Masao Oka through the Alaska Survey Materials at the Center for the History of Meiji University

Yoko Ikari and Ryoji Yaginuma

1　はじめに
2　岡の北方文化研究との出会いと展開
　2.1　ビルケット＝スミスとの出会い
　2.2　北方文化研究からアラスカ学術調査までの展開
3　明治大学創立 80 周年記念アラスカ学術調査団の派遣
4　アラスカ学術調査団の成果
5　岡のアルバム写真を読む
6　岡と「ヌナミウト」
　6.1　専属インフォーマント──サイモン・パニアック
　6.2　岡とヌナミウトとの関わり
7　岡とヌナミウトとフィールドワーク
　7.1　フィールドワークに対する姿勢
　7.2　フィールドワーカーとしての岡正雄像
8　おわりに

*　明治大学
**　明治大学島嶼文化研究所

Key Words：Masao Oka, arctic studies, Alaska Scientific Survey, Anaktuvuk Pass, fieldwork
キーワード：岡正雄，北方文化研究，アラスカ学術調査団，アナクトヴック・パス，フィールドワーク

1　はじめに

岡正雄（1898–1982）の名を聞いて，現在の若い世代の文化人類学者は何を思い浮かべるであろう。現代の文化人類学の研究分野において岡の業績を参照することはほとんどないのではなかろうか。事実，岡の没後すぐに『民族學研究』では追悼特集が組まれ（日本民族学会 1983），直接教えを受けた世代の研究者により座談会（住谷他 1984: 5–43）が開かれて以降は，著名な研究者として人物伝（大林 1991: 103–114; 住谷 1988: 273–291; 中生 2018: 58–59 など）のなかに登場することになる。そこからは，日本民族の起源の議論に参加したことや，戦後，日本の民族学，文化人類学を牽引した人物として理解されるようになっていった。岡はもはや日本の民族学・人類学における学説史のなかの偉人でしかないのかもしれない。いまや岡から直接薫陶を受けた研究者はほとんど残っていないが，そのようななか，日本の民族学・人類学史を研究する過程で岡の研究活動を振り返る作業を行っている研究者がいないわけではない。その筆頭は岡から直接教えを受けたヨーゼフ・クライナーであり，また，清水昭俊や中生勝美などが，岡の戦時中の活動を中心に，直接教えを受けた世代が注目してこなかった時期や分野に光を当てることにより，かろうじて岡の研究活動が語り継がれてきたともいえる[2)]。

岡は，研究活動と学会活動の双方の面で日本の民族学，文化人類学に大きく貢献したことで知られている。それは主に，戦前，ウィーン大学に提出した博士論文『古日本の文化層』を基礎とした日本民族＝文化の源流に関する研究，およびそれを巡って展開された議論，戦中の民族研究所の設立運動と活動，戦後の大学，大学院における若手研究者の育成，および国内外の学会活動等によってである。岡は制度的な大学，大学院での教育というものにとらわれず，自分の直接の教え子にとどまらず，来る者を拒むことなく若手研究者を育てたといわれている。東京都立大学時代の「炉辺談話」にはじまる「座談の雄」（住谷 1979: 434），「座談の名人」（大林 1994: 267）であるとか，学会活動の一環で各種調査団を組織化したことなどから「卓抜なオルガナイザー」（白鳥 1983: 6）などと称されており，まさに「日本民族学のプロモーター」（西村 1988: 162）であった。

しかしながら，特に晩年に大きく展開させた北方文化研究については知られているとは言い難い。戦前，日本民族学会として北千島・樺太における先史学的調

査を実行し，戦後になってもその意欲は衰えることなく，日本民族学協会として「アイヌ民族綜合調査」を企画，実行し，そして 1960 年代に明治大学のアラスカ学術調査団派遣へと展開させた。しかし，後年，彼のこれらの北方文化研究について論じられることはほとんどなかったといえる。おそらく彼の唯一の単著『異人その他』に掲載されなかったことや，日本民族＝文化の起源に比して，北方文化研究に直接関わった民族学・文化人類学者が少なかったことが大きな要因だったのかもしれない。それが漸く 2000 年以降になってはじめて，同じアラスカをフィールドとしてきた岡田淳子（元北海道立北方民族博物館長）が岡の北方文化研究を概観するとともに，研究上の位置づけを行っている（岡田 2010; 2013）。

本稿は岡田の考察の域を超えるものではないが，岡の北方文化研究の背景を踏まえ，主に明治大学アラスカ学術調査団への参加以降の行動について紹介するものである。特に同大学に寄贈・所蔵されている同学術調査団参加以降の資料を整理するなかで見えてきた，北アラスカのヌナミウト[3]（「内陸の民」の意）への思い，最後までアナクトヴック・パス（Anaktuvuk Pass）（図 1 参照）ムラに通い続けたその思いとは何だったのか，そこから見えてくる晩年の岡正雄像に迫りたいと思う。

参照した写真を含む資料は，明治大学大学史資料センターに所蔵されているものである。その一部（ネガとポジ計 1,131 枚の写真）は国立民族学博物館の「地域研究画像デジタルライブラリ」（以下，DiPLAS と記載）によってデジタルアーカイブ化されている。デジタルアーカイブ化されていない，現在整理中の岡正雄のアラスカ関連の写真アルバム 17 冊（以下，写真アルバムと記載）（写真 1），および資料も使用した[4]。

また，岡田淳子氏（2018 年以降，特に 2022 年 5 月 8 日），岡の息子・岡千曲氏（2021 年 11 月 28 日），大貫良夫氏（2022 年 12 月 9 日）との面談，およびその後の何度かのやり取りによって得た情報も含まれている。

表 1 の「岡正雄のアラスカ，アナクトヴック・パス（AKP）訪問史」は，「岡正雄年譜（以下，「年譜」）」（岡 1979b: 481–489），写真資料，その他の資料を基に，岡がアラスカを訪問した年代と概要をまとめたものである[5]。全て北アラスカのブルックス山中に位置するアナクトヴック・パスというムラを訪れている。1960 年の明治大学アラスカ学術調査団の第一次調査，そして民族学班だけが派

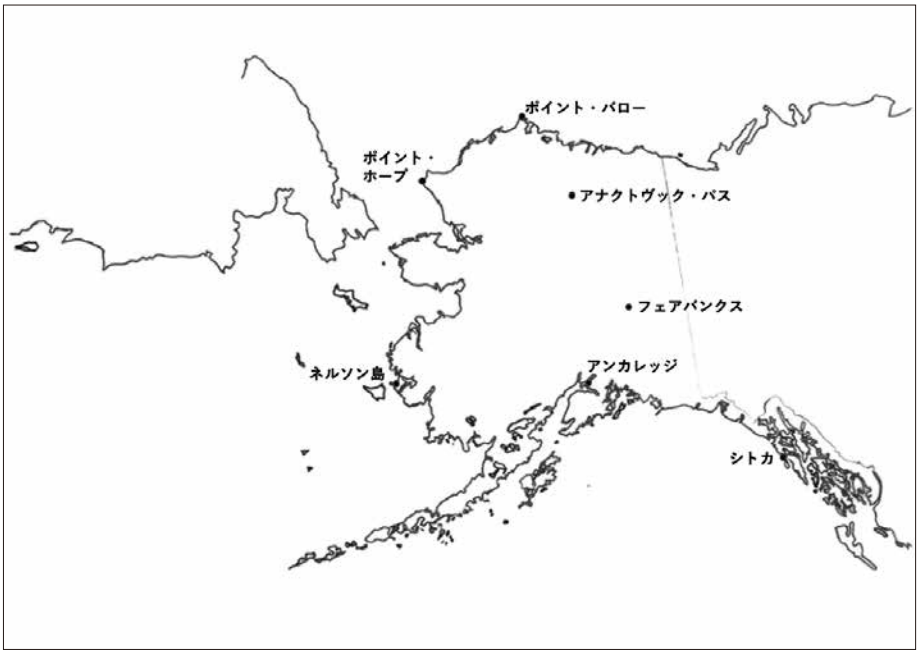


図 1　アラスカの地図（岡の主な調査地と訪問地）（著者作成）

写真 1　「アラスカ」と記された 17 冊のアルバム。
2022 年 2 月 18 日，柳沼亮寿撮影。

遣された，1962 年の第二次調査，および 1967 年の第三次調査以外は，岡が半ばプライベート的にアラスカを訪問している。

表 1　岡正雄のアラスカ，アナクトヴック・パス（AKP）訪問史

順序	1	2	3	4	5	6	7	8
年	1960（昭和 35）	1962（昭和 37）	1964（昭和 39）	1967（昭和 42）	1973（昭和 48）	1975（昭和 50）	1977（昭和 52）	1984（昭和 59）
年齢	62	64	66	69	75	77	79	−
機会	明治大学アラスカ学術調査団（第一次）	明治大学アラスカ学術調査団（第二次）	第 7 回国際人類学民族学会議（モスクワ）の後，立ち寄り	明治大学アラスカ学術調査団（第三次）（文部省科学研究費）	プライベート（訪問後，第 9 回国際人類学民族学会議（シカゴ）に出席）	プライベート	プライベート	納骨
目的	・日本の先史文化と環北太平洋地域の先史文化・原住民文化との比較研究 ・第二次調査地選定の予備調査	・北アラスカの冬季生活の実態究明 ・南西アラスカの集中的調査		・精緻な民族誌の完成と研究の総決算 ・エスキモー学の樹立				同上
期間	5/5 ～ 7/12（AKP:6/4-22）	3/23 ～ 7/22（AKP: 4/3-27），7/22 ～ 8/13（各研究所等），岡は 7/29 よりウィーンへ	8 月（AKP：滞在期間不明）	調査団：6/20 ～ 9/19 岡：8/1 ～ 20（事後ヨーロッパへ） （AKP：滞在期間不明）	8 月初め～ 9 月（AKP：滞在期間不明）	7/25 ～ 8/30（AKP:8/12-23）	5/25 ～ 6/19（AKP：5/30-6/11）	7 月
主な同行者	岡正雄 祖父江孝男 他に地理学班，考古学班，山岳班，報道班，記録映画班	岡正雄 蒲生正男 岡田宏明	岡正雄	蒲生正男 岡田宏明 宮岡伯人（エスキモー［ユピック］語）	岡正雄 岡あづさ 大貫良夫（野外民族博物館リトルワールド）	岡正雄 岡千曲 大貫良夫	岡正雄 岡澄子 宮岡伯人 大貫良夫	岡澄子 岡あづさ
その他の主な調査地・訪問地	・北西海岸諸族とエスキモーを概括的に広く調査	ポイント・バロー ポイント・ホープ ネルソン島		ネルソン島 ポイント・バロー ポイント・ホープ	・シトカのマウント・エッジカム・ハイスクールに勉学中の AKP の少年少女に会う	東南アラスカの各地 フェアバンクス ポイント・バロー	・6 月 13 日にポイント・バローで第 1 回周極イヌイット会議を傍聴 ・クジラ祭り視察	
備考	・読売新聞社，東映，日本テレビの後援 ・AKP でサイモン・パニアックに出会う	・ネルソン島でフランク・アマデウスに出会う			・岡はリトルワールドの理事	・岡帰国後の 9 月 18 日，サイモン・パニアック死去	・1978 年秋，サイモン・パニアックの息子ルーズベルトを日本に招待	・1982 年 12 月 15 日，岡，84 歳で逝去 ・岡の納骨と友人たちの墓参り

（「岡正雄年譜」，写真アルバム，その他の資料により作成）

2　岡の北方文化研究との出会いと展開

2.1　ビルケット＝スミスとの出会い

1929 年，岡は澁澤敬三の支援を受けてウィーンに留学した。4 月に日本を出発し 7 月末にウィーンに到着するまで，4 ヶ月近くの時間をかけて，旧ソ連，北欧諸国の諸都市を周り，著名な研究者に会っている。ロシア人で日本民俗学の天才と呼ばれたニコライ・ネフスキーの紹介状を携えて日本を発っていることなどから，ウィーン留学前から各国の著名な研究者に会うことを目論んでいたことがうかがえる。このなかで，6 月，スウェーデンのゲッテボーリで南米民族学の泰斗

ノルデンショールドに会い，コペンハーゲンのビルケット＝スミス（Kaj Birket-Smith）に会うことを勧められたという（岡 1962: 1）。新進気鋭のエスキモー学者で学界に注目されだしたビルケット＝スミスに会いに，6 月 10 日，岡はコペンハーゲンの国立博物館民族学部を訪れている。この時，出版されたばかりの *The Caribou Eskimos: Their Cultural Position* という調査報告書が贈られた。その現物が写真 2 である。表紙をめくると次のようなメモが目にとまる（円で囲んだ部分）。

「1929 年 6 月 10 日，コペンハーゲン市ナショナルミュジアム，土俗部に於いて，ビルケット－スミス博士に會ふ。エスキモーの少壮学者。」

この時，ふたりはすぐに親しい仲となり，岡は自分がもっていた日本の御守りをビルケット＝スミスに渡したという（Kreiner 2016: 10−11）。通常，自分がもつ御守りを他人にあげることはないが，岡は，返礼のために適当なものをもちあわせていなかったため，自身の大切なものを彼に贈呈したのであろうか，それとも

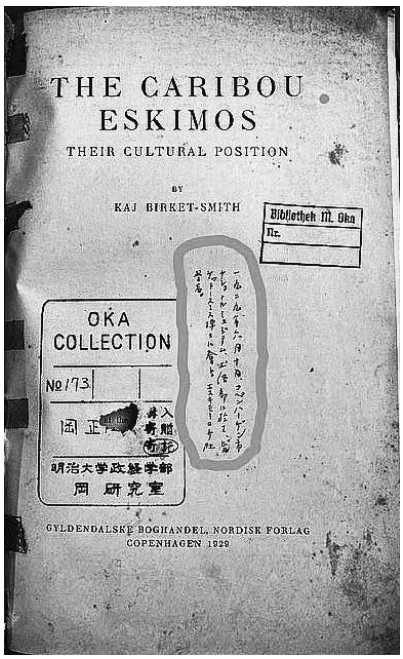


写真 2　ビルケット＝スミスより贈られた *The Caribou Eskimos*。
2022 年 2 月 18 日，柳沼亮寿撮影。

日本の信仰的民俗資料だからこそあえて彼にあげたのであろうか，真相はわからない。岡は，後にエスキモーへの興味についてこう振り返っている。「私の，極北の人間，とくにエスキモーに対する興味はいつごろからはじまったものか，はっきりした記憶もないが，しかし，ビルケット・スミス博士との邂逅がこの関心をいっそう深めたことはたしかのようだ」（岡 1962a: 1）。

2.2　北方文化研究からアラスカ学術調査までの展開

表 2 は，岡のアラスカ学術調査までの北方文化研究について，「年譜」を中心にその他の資料を踏まえて取りまとめたものである。ところで，岡の北方文化研究について非常に興味深いことをクライナーが述べている。それは，博士論文『古日本の文化層』において，岡は，南西諸島の宗教観念や行事をよく取り上げて論じているが，アイヌ文化については序文の「学史」で触れているだけで本論

表 2　アラスカ学術調査に至るまでの岡の北方文化研究

年		年齢	学術活動	備考
1929	（昭和 4）	31	ウィーン大学留学のための渡航途中，デンマークの国立博物館でエスキモー学者 ビルケット＝スミスに出会う	
1933	（昭和 8）	35	『古日本の文化層』により，Ph. D の学位を受く	論文には「これからは北方研究が重要である」と簡単に記載（クライナー 2021: 36）
1936	（昭和 11）	38	北海道大学付属博物館でアイヌの民俗資料を調査	
1937	（昭和 12）	39	ビルケット＝スミスが組織する国際極北民族学調査委員会のメンバーとなる	
			北千島占守島，樺太多来加地方の先史学的発掘調査	エスキモー研究の興味強まる（「年譜」より）
1938	（昭和 13）	40	第 2 回国際人類学民族学会議で「北千島文化の問題」として報告	ジェンネス，コリンズ，デ・ラグーナなどのエスキモー学者と知り合う（「年譜」より）
1941-45（昭和 16-20）		43-47	第 2 次世界大戦	
1951	（昭和 26）	53	北海道日高沙流川地方のアイヌを調査	日本民族学協会のアイヌ民族綜合調査委員長となる（「年譜」より）
1952	（昭和 27）	54	第 4 回国際人類学民族学会議で「アイヌの親族体制」として報告	
1954	（昭和 29）	56	デンマーク国立博物館との資料交換事業により，91 点のグリーンランド・イヌイットの民俗・考古資料が民族学博物館（東京・保谷）に贈られる	1952 年，ウィーン開催の国際会議の際，ビルケット＝スミスと資料交換事業を決定
1956	（昭和 31）	58	第 5 回国際人類学民族学会議で，ラルゼンから，絶滅したと信じられていた北アラスカ内陸エスキモー（ヌナミウト）の残存を聞く	岡はヌナミウトにつき「興味が俄然わいた」と述べている（岡 1961d：165）
			米国，カナダの民族博物館を視察	米国，カナダのエスキモー研究の進展に刺激を受け，エスキモー調査の計画を考える（「年譜」より）
1957	（昭和 32）	59	北海道各地の各博物館を訪問	1958（昭和 33）年の可能性あり（岡 2007：16）

（「岡正雄年譜」，その他の資料により作成）

では全く取り上げておらず，また，北方文化については論文の終わりの方で「これからは北方研究が重要である」と簡単に記しただけで終わってしまっているというのだ（クライナー 2013: 21; 2021: 36）。これは，日本民族＝文化への北方文化の流れについて，岡は当時，有効な材料をもちあわせていなかったからであろうか。それとも明確な流れを見出すことができなかったからであろうか。いずれにしてもそのような背景から，博士論文完成後に彼の北方文化研究が本格的にはじまったものと考えてよいように思われる。

「年譜」によれば，この後，岡は 1936 年の北海道大学付属博物館でのアイヌの民俗資料調査を皮切りに，1937 年，当時既に北千島にて三度の考古学的調査を行っていた在野の北方考古学・民族学者，馬場脩[6] とともに日本領最北端の北千島の占守（シュムシュ）島と樺太の先史学的調査を行い，翌年 1938 年の国際人類学民族学会議で「北千島文化の問題」と題して報告している[7]。「年譜」には，「ジェンネス，コリンズ，デ・ラグーナなどのエスキモー学者と知り合う」と書いてある。発表に対して北米先住民研究者のフレデリカ・デ・ラグーナ（Frederica de Laguna）から直接コメントを受けたことにより，共通の関心をもっていることを認識したことによるものであろう。間もなく第二次大戦に突入し，研究の継続は断念せざるをえなかった。ところが，戦後も関心は衰えることなく，14 年の時を経た 1951 年，日本民族学協会をあげた錚々たるメンバーによって今度は北海道日高の沙流川地方のアイヌについての大規模調査を企画，実行した。前述したように，北方からの文化の流れを追究するにはアイヌ文化に関する民族学的調査は不可欠であったに違いない。そして岡は，翌年の 1952 年に「アイヌの親族体制」としてウィーン開催の第 4 回国際人類学民族学会議で報告している[8]。

なお，この間，ビルケット＝スミスが組織する国際極北民族学調査委員会のメンバーとなってはいるが，「年譜」からはそれ以外に彼との関係は読み取れない。しかし，岡がウィーンにいる間，ビルケット＝スミスは，客員教員・講演者としてウィーン大学を訪れていたし（クライナー 1979: 462），その後も国際会議などで会うとともに書簡のやりとりを通じて彼との関係は途絶えることはなかったようだ。そして，1930 年代はじめには，京城大学の秋葉隆を通じて，デンマーク国立博物館による朝鮮半島シャーマニズム関係のコレクションを実現させ，戦後の 1954 年には，デンマーク国立博物館と東京・保谷にあった日本民族学協会附

属民族学博物館との間でグリーンランドの民族・考古資料と日本の考古資料の交換を成立させている（小谷 2007: 23）。また，馬場によれば，ビルケット＝スミスは，日本の学者とともに樺太の考古学的調査を日本政府に申し込んだが，学界の一部の不調により中止されたという（馬場 1979: 9–10）。この事実について岡自身は何ら述べていないのだが，この日本の学者とは岡正雄にほかならないものと思われ，北千島・樺太の先史学的調査は，海外の研究者を巻き込んだ戦略が実現しなかったため，男爵三井高陽の援助に頼ったのではなかろうか（岡 1979b: 481）。いずれにしても，ビルケット＝スミスとの関係は，はじめて会って以降も継続されていたものと考えられる。

このようななかで，殊エスキモーへの関心はというと，1956 年フィラデルフィア開催の第 5 回国際人類学民族学会議の際に，それまで絶滅したと信じられていた北アラスカ内陸エスキモーのヌナミウトの残存を聞くと，「内陸エスキモー最後のグループに対する興味が俄然わいた」（岡 1961d: 165）と述べており，「アメリカ，カナダにおけるエスキモー研究の進展に刺激を受け，10 月帰国後エスキモー調査の計画を考える」（岡 1979b: 487）ようになる。日本列島に連なる北方地域に留まらず，その先のエスキモーが住む極北地域への関心をもち続けてきたわけだが，このヌナミウトの「再発見」こそが，岡を大きく動かしたのは疑いえないであろう。

3　明治大学創立 80 周年記念アラスカ学術調査団の派遣

岡は，1960 年 4 月に東京都立大学から明治大学に転任し，翌月の 5 月にアラスカ学術調査団に参加している。これはどう考えても明治大学への転任が予め決まっていた上での学術調査団の企画であったことは疑いえないであろう。岡は 1951 年から明治大学で非常勤講師として教鞭をとっていたとはいえ，転任早々，このような大規模調査団に参加するとは一体どういうことなのであろうか。祖父江孝男によれば，どうやら当時，既に明治大学から東京大学に転任していた泉靖一の強力な働きかけにより定年退職に先駆けて明治大学に招聘されたのだという（祖父江 1988: 177）。いずれにせよ，明治大学は 1960 年に創立 80 周年を迎えるにあたり，学術的にも一大事業を望んでいたものと思われる。そのようななか

で，大学側が岡に直接相談したのか，それとも泉を通したのかは定かではないが，明治大学にとって，元日本民族学協会理事長で国際人類学民族学会連合副会長の岡正雄という人物に不足はなかったといえよう。なお，調査団派遣 1 年前の 1959 年，自分の転任に先だって，同じ東京都立大学の助手であった祖父江が明治大学に転任していることから，アラスカ調査の準備に当たらせていたものと思われる。留学経験があることから米国の各大学や研究機関との事前の情報収集と調整，調査時の対応に適切な人材だったのであろう。

ところで今ひとつ注目しておくべきことがある。岡の日本民族＝文化の源流に関する研究の集大成といわれているのが 1958 年に発表された「日本文化の基礎構造」（岡 1979c）である。しかし彼はそれ以降，この問題を進展させることはなかったのである。岡は 1951 年から東京都立大学その他で教鞭をとってきたわけだが，研究においては，日本民族＝文化の起源の問題に関して修正を加えつつ 1958 年に集大成することにより，アラスカ・エスキモー研究へと転換したことになる。「年譜」によれば，1959 年は 5 月に郷田洋文，村武精一らと瀬戸内海鍋島調査に出かけた以外の特段の行動は記録されていない。おそらく，この年にはアラスカ行の検討に入っていたのではなかろうか。

さて，次に第一次調査の内容について見てみよう。第一次調査の概要をまとめたものが表 3 である。海外渡航が簡単なことではなかった時代，大規模調査団を

表 3　第一次アラスカ学術調査団の概要

1	期間	1960 年 5 月 5 日～ 7 月 12 日
2	目的	マッキンリー山登頂（日本人初の北米大陸最高峰の登頂）
		学術調査（少なくとも 3 年継続）
3	調査団構成	
	地理学班	渡辺操，松田孝，鍛冶晃三
	民族学班	岡正雄，祖父江孝男
	考古学班	杉原荘介，戸沢充則，岡田宏明，他（ウィスコンシン大学との共同発掘調査）
	報道班	読売新聞（後援金），日本テレビ（事後『アラスカの顔』として放映）
	記録映画班	東映㈱（後援金）（事後『マッキンレー征服』として東映系の劇場で公開）
4	民族学班の目的	・日本の先史文化と環北太平洋地域の先史文化・原住民文化との比較研究（特に，日本の文化形成における「北方的要素」の解明） ・第二次調査地選定の予備調査

（明治大学（1959; 1960a; 1960b），『アラスカ』（渡辺他編 1961）により作成）

組織してアラスカに派遣したこと自体，敬意に値するものであるが，何といっても第一次調査の目玉はメディアの帯同と後援金の取得，そして募金であろう（明治大学 1962）。ただ，このような人類学的探検と映像撮影という手法はこの時はじまったものではない。1955 年，京都大学のカラコラム・ヒンズークシ学術探検，1956 年，東京大学のイラク・イラン遺跡調査にはじまり，明治大学アラスカ学術調査団はその最後になるという（飯田 2007: 245）。岡としては，1957 年，日本民族学協会が派遣した東南アジア稲作民族文化綜合調査団に直接関わった事業として，その経験を基礎としていたものと思われる。また，アラスカ調査におけるこのマッキンリー登山と学術調査という抱き合わせは，岡のアイデアだったともいわれている（岡田 2010: 6; 2013: 51）。学生時代から登山に親しんだ岡は，明治大学山岳部の実績や，岩宿遺跡の発掘に関わった考古学的経験に着目するとともに，既に他大学が派遣していた地域ではなく，自身の研究上の関心のあるアラスカ方面に焦点を当て，スポーツ，学術双方の関係者から支持されたという（岡田 2013: 51）。

この時，考古学班はウィスコンシン大学との共同発掘調査としてアラスカ半島中部のポートモーラーのホット・スプリング遺跡に赴いた。一方，民族学班の移動ルートは，まず，アンカレッジに入り，シアトルからバンクーバーを経て，トリンギット，チムシアン，ハイダと呼ばれる北西海岸先住民が居住する各地を回っている。これは，第一次調査の目的である「日本への北方文化の流れ」もさることながら，岡自身が当初から関心を寄せていた秘密結社や仮面者訪来の習俗をもつ諸族を直に調査してみたいという望みがあったからではなかろうか。そして，アラスカの中央，フェアバンクスから北アラスカの内陸エスキモー「ヌナミウト」の住むアナクトヴック・パスに移動するのである。

実は，この第一次調査に向けては 2 つの計画書がまとめられている。第一次調査の前年の 1959 年 10 月にまとめられた計画書[9] にはアナクトヴック・パスは調査候補地としてはあがっておらず，翌 1960 年 2 月の計画書の改訂版で追記されているのだ（図 2）。前述したように，1956 年に内陸エスキモーが残存しているとの情報を得てはいたものの，ヌナミウトの人々が定住したというムラへの訪問の手立てがつかず，文献調査，米国の専門家への問い合わせを経て（祖父江 1961: 15–16），漸く 1 月頃までに訪問の目途がついたのであろう。次に北極海岸

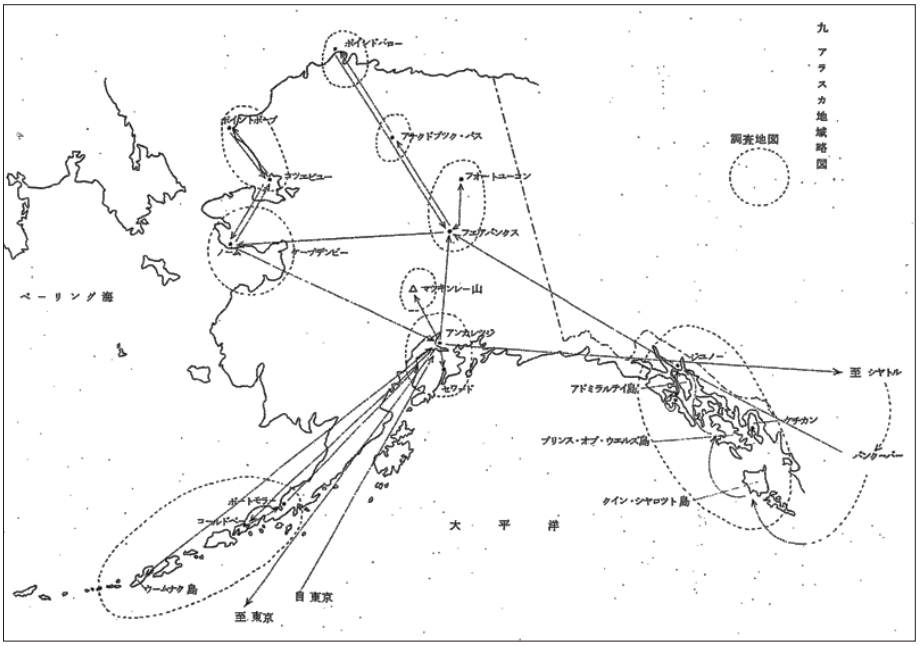


図 2　第一次アラスカ学術調査団の調査計画地改訂版（出典：明治大学 1960a）

のポイント・バロー，ポイント・ホープ，ベーリング海峡のコッツヴュー，シシュマレフ，ノームを経て帰国の途についたのである。アラスカ半島では考古学班が調査を行っている。

既に述べたように，ヌナミウトとは「内陸の民」という意味である。かつて北アラスカ内陸のブルックス山中を移動して生活していたヌナミウトは絶滅したと信じられていたが，1943 年に偶然「発見」され，1950 年までにアナクトヴック・パスに定住した。この情報に接したノルウェー人ジャーナリストのヘルゲ・イングスタッド（Helge Ingstad）が，1949 年から 50 年にかけて約 10 ヶ月間ここに滞在し，*Nunamiut*（1954）という本を著したのである。これはヌナミウトの暮らしについてまとめられたはじめての本であった。岡が所有していた *Nunamiut* の表紙をめくると「1960 年 1 月 18 日，神田の古書店で求む」という岡のメモがある（写真 3）。アナクトヴック・パス訪問の目途をつけた後に手配して入手したものか，それとも古本屋街で偶然見つけたのかはわからない。ほとんど全ページに赤鉛筆のアンダーラインやメモがあり，ところどころ人物名の綴りを訂正し

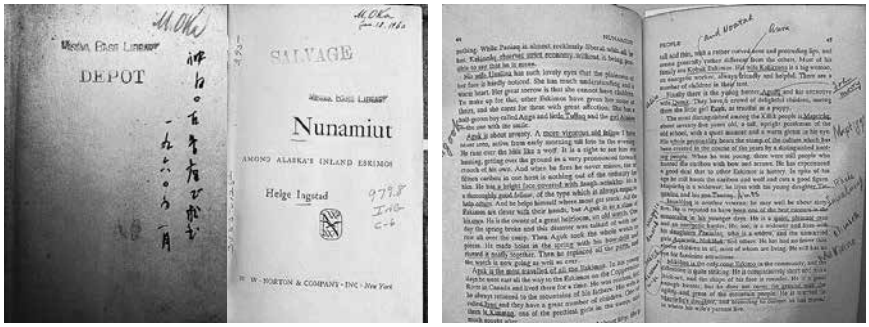


写真 3　岡が所持していた *Nunamiut* の本。2022 年 2 月 18 日，柳沼亮寿撮影。

ている。岡は，第一次調査への出発までの 3 ヶ月の間にこれを精読し，さらに，本に登場するひとりひとりを現地で確認しつつ個人を特定しているのがよくわかる。このヌナミウトについてまとめられた唯一の本をベースにして現地調査に臨んだのであろう。

次に第二次調査について見てみよう。第二次調査計画に見られる移動ルートを見ると（図 3），波線の円で囲まれた南西アラスカのデルタ地帯は，第一次調査の際には訪問しておらず，1961 年 11 月の計画段階で検討されていたことがわかる。岡によれば，これは第一次調査後，国際学会で会った研究者からのアドバイスによるものであったという（明治大学 1961）。しかし，この段階でも調査地はまだ選定されていない。第二次調査には岡のほか，蒲生正男，岡田宏明が参加しているが[10]，結果的に，①極北内陸・カリブー狩猟エスキモー（アナクトヴック・パス），②極北海岸・海獣狩猟エスキモー（ポイント・ホープ），③南西アラスカ・漁撈エスキモー（ネルソン島）と，生態的環境，およびそれに基づく生業の異なる 3 つの集団について調査することとなり，研究上の対象地としては比較の点で意味あるものとなったといえる。調査報告書（明治大学 1962）によれば，アラスカ到着後に現地で南西アラスカでの調査地をネルソン島に絞ったことがわかる。破線で囲ってあるところには 8 か所の候補地があり，このなかのカイアリガミウト（Kaialigamiut）を現地に行って選定している。このように，第二次調査の対象地選定がぎりぎりまで検討されていたことがわかる。

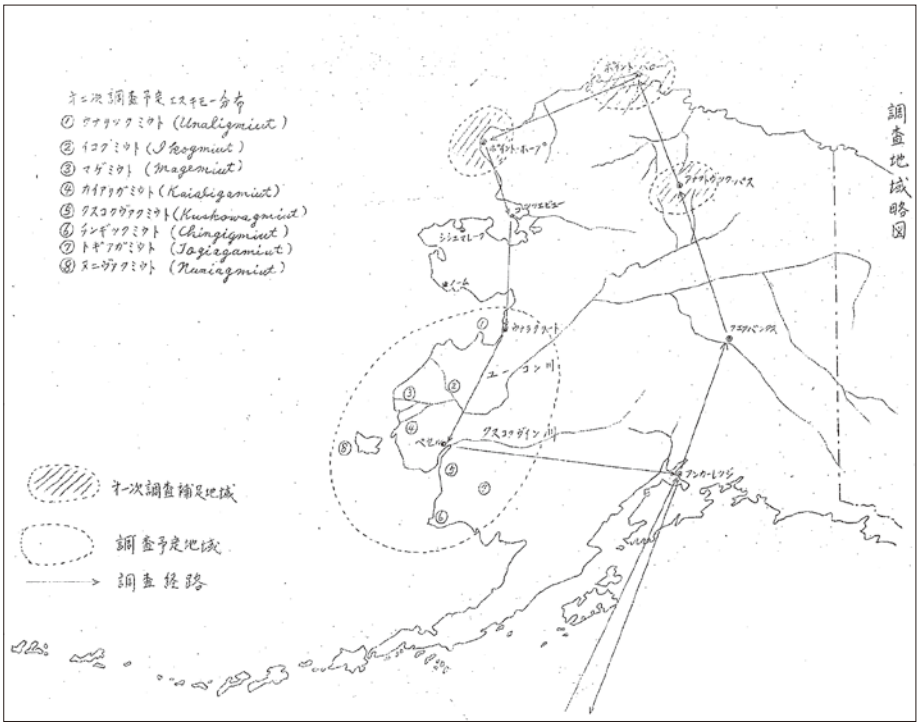


図 3　第二次アラスカ学術調査団の調査計画の移動ルート（出典：明治大学 1961）

4　アラスカ学術調査団の成果

関係者にはよく知られているが，第一次調査の成果は調査の翌年 1961 年 11 月に古今書院から出版された『アラスカ』（渡辺他編 1961）にまとめられている。この『アラスカ』は全 267 頁のうち本文は 186 頁あるが，何と岡はそのうちの 101 頁を執筆しているのだ（岡 1961b; 1961c; 1961d）。寡筆であったとよくいわれる岡だが，これは驚きであり岡の意気込みが感じられるといえるだろう。また，祖父江も同年『エスキモー人』（光文社）を著しており，より一般向けにはこちらの方が知られている。一方，これはほとんど参照されることがないのだが，調査団は調査を行った数ヶ月後の 11 月付にて明治大学に報告書を提出しており（明治大学 1960b），各班は，調査の課題，行程，調査成果をコンパクトにまとめている。大部分は参考資料からなっているが，収支決算報告，山岳班・学術班の

装備・機材の寄贈・借用品リスト，収集資料リスト，成果発表の詳細リストなどがある。第一次調査の成果は，山岳班のマッキンリー登頂を含め，新聞報道掲載が 152 編（うち半数が読売新聞），週刊誌や教育誌などの雑誌への掲載が 28 編，テレビ・ラジオなどでの放送番組が 11 本，関係大学，各種学会や研究会，地方の教育委員会などでの講演報告会は 31 回におよび，調査結果は幅広く伝えられた。このうち，岡は 13 回もの講演報告を行っている（明治大学 1960b）。特に一般向けの成果として主要なものは表 4 のような映画公開やテレビ放映があげられる。

民族学班は現地で各種の民俗資料を収集・購入している。槍頭，回転式銛頭などの骨角器の狩猟具，石器，木製品などであるが，これらは，長年，明治大学の政治経済学部があった駿河台校舎旧 7 号館の地下に眠っていた。それが，2000 年，校舎の建て替え時に発見され，政治経済学部の山内健治（助教授：当時），および，第一次調査以降調査団に参加した岡田宏明（北海道立北方民族博物館長：当時）がこれらを確認し，翌 2001 年に同博物館に寄託されたという経緯がある。これらは 636 点にもおよぶもので，後に同館にて寄贈資料目録としてまとめられた（北海道立北方民族博物館編 2013）。

次に，第一次調査と第二次調査をとおして見た岡の研究上の関心とその成果については主に以下のようなものがあげられる。

(1)「アラスカ・内陸エスキモーの変動」（岡 1961a）

これは，第一次調査に基づいて書かれた論文体裁をもつ唯一の論稿である。1950 年までにアナクトヴック・パスに定着した内陸エスキモーの伝統的な移動生活と社会構造，および定着による変化の兆しと将来予想される社会変容につい

表 4　アラスカ学術調査の成果（展示会，映画，テレビ放映）

	タイトル	内容	開催日	主催 / 製作等
1	第 3 の極地アラスカ展	写真展	1960 年 8 月 30 日～ 9 月 4 日（上野松坂屋）	読売新聞社，学術調査団 文部省後援，富士写真フィルム㈱協賛
2	マッキンレー征服	学術班長編記録映画	1960 年 9 月 3 日（試写会・学術報告後援会）	東映㈱製作
3	第三の極地マッキンレー	山岳班行動記録	1960 年 8 月 20 日	日本テレビ製作
4	アラスカの顔	学術班行動記録	1960 年 9 月 10 日	日本テレビ製作

（明治大学（1960b）により作成）

て論じたものであり，『アラスカ』（渡辺他編 1961）における報告とは別に論点を絞ってまとめられたものといえる。まず，かれらは「純粋なカリブー狩猟民のグループ」である。婚姻に際しては妻方居住方式がとられ，4 ～ 5 の少数の家族がいわゆるバンドを構成し，夏季に集合し，冬季に分散する社会形態であった。「父系にやや傾きをもった双系性」の親族組織をもち，養子制度や生態的に異なる地域にパートナーをもつ制度などにより，相互扶助・協力の関係が重視されていた。社会階層も首長も存在しない，人間社会のもっとも簡素な社会組織であった。ここで岡は，戦後，ヌナミウトの「再発見」に至った背景として重要な指摘をしている。内陸エスキモーであるヌナミウトは，毎年，海岸エスキモーのタレミウト（「海の民」の意）とコルヴィル川の中間地点で山の産物と海の産物との交易の旅に出ていた。しかし，この慣行は 1910 年代にすたれてしまい，外界との接触の途絶が白人社会に内陸エスキモーの消滅を信じさせるもとになったという。次に 1950 年以降の定着後の社会変化について，こう述べている。行政的必要から姓をもつようになったことから，父からの姓の継承，不動産の相続という現象が起こり，父系同族としての「同姓集団」が発生するのではないか，さらに，定着したことによって，他のグループから孤立し，必然的に村内婚の傾向が生み出されるのではないか，と。また，アメリカ政府の行政下にはいったことで，英語力，白人との折衝，事務能力，富をもつものが新しい有力者人間像となってきている。そして，過去 10 年間に社会階層らしいものが発生しつつあるとして，ムラを経済的に 3 つのクラスに分けて解説しており，従来の相互協力，扶助という基本的人間関係が破壊されつつあると記している[11)]。

（2）「極北における《古代文化》の断片」（岡 1962a）

これは，わずか 4 頁のものだが，幾つかのきわめて重要な指摘がなされている。舞台は北極海に面したポイント・ホープだが，紀元後間もない頃に突如として花開き忽然として消えた高文化，「イピウタック」文化（鉄刃彫鏤具，精巧な彫刻品，特殊な埋葬風習）に思いをはせ，古エスキモー文化の地の上に中国古代文化の断片が鉄器とともにこの地に到達し[12)]，西方からの文化と混合した文化であろうと類推したのである。

(3)「アラスカの風物」,「エスキモーの生活と社会」(岡 1962b)

これは，第二次調査中から，アナクトヴック・パス，ポイント・ホープ，ネルソン島の 3 か所のエスキモーの生活と社会について，中部日本新聞のサンデー版に「アラスカの風物」(7 月 1 日，7 月 8 日，7 月 15 日，7 月 22 日，7 月 29 日）と「エスキモーの生活と社会」(8 月 28 日）と題して，計 6 回にわたって掲載されたものだ。帰国後に投稿した最後の記事「エスキモーの生活と社会」において，岡は，エスキモー文化のアラスカにおける郷土が南西アラスカにあるのではないかという想定を強くしたという。同文化が極北エスキモーに比して複雑で，北西海岸諸民族文化の流入とともに，メラネシアや日本島の古層文化と類似する要素が多いことに驚きをあらわし，「カズギ（qasgi)」とよばれる「男の宿」の存在と面を被った者が女子供だけの家である「ナ（na)」を訪れて物をもらって歩く仮面者訪来の習俗に注目している。

(4)「サイモン・パニアックの一生」(岡 1979a)

サイモン・パニアックとは，後述するように，岡の半ば専属インフォーマントとなった人物である。かつての移動生活から定住し，さらに現代的な社会制度への編入を経験するまでの彼の詳細なライフヒストリーで，上下 2 段 26 頁におよぶものだ。パニアックが，もの心ついてからいつ誰とどこに滞在し，移動していたかなど，驚くほどに詳細な移動生活史である。1962 年に書きとどめていたものを 1979 年に『どるめん』の編集者である田中基が懇願して同誌上に掲載したものだという。同じアラスカをフィールドとした蒲生は，このアプローチと成果を今後のあるべき姿として高く評価していたという（岡田 2010: 9)。

以上が岡のアラスカ調査に基づく主な成果であるが，もともとの調査目的であった「日本島への北方文化要素の流入，エスキモーとその文化の移動」については，その後，進展させることはなかった。岡田淳子は，岡が研究の中心に据えた課題として，①エスキモーと文化の移動経路，②エスキモー社会の文明化による文化変容，の二つに集約させて論じている。しかしながら，一方で秘密結社や仮面者訪来という長い間もちつづけた特別な関心は，南西アラスカにおいて驚きをもって確認している。おそらくは初期の主要論文「異人その他」(岡 1928）以

来，岡にとって頭から離れなかった永遠のテーマであったのかもしれない。だが，これもその後深化させることはなかった。清水昭俊のいうように「類似の「暗示」」（清水 2013: 129）にとどめたのであろうか，それとも「暗示」にとどまってしまったものであろうか。

第二次調査後に岡が書いたものは，主に上記（3）の新聞連載にとどまっている。一方，第二次調査にはじめて参加した蒲生正男は，調査後，主要論文となる二つの論文を発表している（蒲生 1964; 1965）。蒲生は親族名称を詳細に調査し，移動型社会としてのバンドがどのよう関係者で構成されているかを，婚姻に際した居住方式と狩猟行動事例とかれらの考え方から突き止めた。アラスカ・エスキモーにおけるバンドは，ひとりの男性にとって「ニガウ（nigau）」と呼ばれる女性血族の配偶者（姉妹の夫や娘の夫など世代を超えた名称）との関係が基調となっていたことを明らかにしたのである。しかしこの指摘は紹介されこそすれ，双系性社会を巡る社会組織論としても北方諸民族の社会組織論としても議論されることはほとんどなかったといえる。1960 年代のエスキモーの社会構造論は，主としてマードックの「エスキモー型」（マードック 1978）の該否に焦点があてられることが多く，蒲生のように伝統的な構造原理を抽出する作業をする研究者はほとんどいなかったといえる。それは，養子制度や同名者などのパートナー制度などにより，現実のバンドの構成は多種多様であり，構造原理どおりであるとは限らない例が多く存在していたからかもしれない。ただ，蒲生のこの論文が英語論文であったなら，当時のエスキモーの社会組織論におそらく一石を投じたに違いないであろう。

次に，第三次調査は，1967 年，主に文部省科学研究費によるわずかな予算により，蒲生団長の下，岡田宏明，これにユピック語の専門家宮岡伯人がはじめて参加してネルソン島の調査を実施した。第三次調査には，岡も参加したように記載されることが多いが，正式なメンバーにはなっておらず，同島を訪問した記録はない[13)]。「年譜」によれば，「アナクトヴック・パス，ポイント・バローに滞在」とあり，「蒲生正男先生年譜」によれば，ネルソン島のほかにはアナクトヴック・パス，ポイント・ホープを調査したとの記載がある（上野 1982）。また，岡田淳子は「1962 年の補足として，ベーリング海沿いの北の地域も廻ったらしい」とのみ述べていて（岡田 2007: 127），判然としない。

また，ここでは詳述しないが，1972 年以降，岡田宏明が岡田淳子とともにアラスカ半島のホット・スプリング遺跡の発掘調査，およびネルソン島の調査を継続したことにより明治大学アラスカ学術調査の研究が継承されることになったといってよいだろう。そして，後年，両氏が館長を勤めることとなった北海道立北方民族博物館により，岡田宏明の研究を総括するシンポジウム（岡田他編 2007）やアラスカと日本との関係に焦点を当てた特別展（北海道立北方民族博物館編 2018b）などが開催されることにより，幾度も振り返られることとなったのである。

5　岡のアルバム写真を読む

ここでは各年代のアルバム写真のすべてを紹介することはできないが，筆者らが選定した写真について，表 1 を参照しながら見ていこう。

1960 年の第一次調査時は岡と祖父江が 6 月 4 日から 22 日まで，1962 年の第二次調査時には，岡のほか，蒲生，岡田宏明，記録班の渡部雄吉，野呂進が 4 月 3 日から 27 日までアナクトヴック・パスを訪れている。

(1) 第一次調査（1960 年）or 第二次調査（1962 年）（DiPLAS より）

明治大学に所蔵されていて，DiPLAS を通してアーカイブ化された写真のなかには，残念ながら，第一次調査時か第二次調査時の写真かを判別できないものもある。写真 4 は上空から見たアナクトヴック・パスのムラである。ムラ到着の着陸時の写真かと思われる。テントが多く見られるので夏であろう。ということは 1960 年時の可能性が高い。アナクトヴックとは「(カリブーの）糞の多いところ」という意味で，カリブー（アメリカ産の野生のトナカイ）のとおり道である。

写真 5 はカリブーの毛皮が干されているところを撮影したものである。テントの近くには必ずこのように毛皮やら肉やらが干してあったという。ツンドラにはカリブーの角や骨が放置されている（写真 6)。仕留めたカリブーの頭をその場において帰ることは昔ながらの習慣である。また生きたカリブーとなって戻ってくるからだという。写真 7 には夏用のテントが写っている。近くの山にはまだ雪が残っているが，平地では既に溶けてなくなっている。とすれば，写真 7 は

写真 4　上空から見たアナクトヴック・パスのムラ（DiPLAS より）。撮影日・撮影者不明。

写真 5　カリブーの毛皮が干されている（DiPLAS より）。撮影日・撮影者不明。

写真 6　放置されたカリブーの角や骨（DiPLAS より）。撮影日・撮影者不明。

写真 7　夏用のテント（DiPLAS より）。撮影日・撮影者不明。

写真 8　長期滞在のための半地下の芝土小屋（DiPLAS より）。撮影日・撮影者不明。

1960 年だと思われる。写真 8 は内陸を移動していたヌナミウトが長期滞在する際につくって住んだという半地下の芝土小屋である。ツンドラの土をブロック状に切って積み重ねた土小屋である。雪が多く残っているので夏ではない。とすれば，写真 8 は 1962 年 4 月に撮影されたものだと思われる。1962 年には全員がこの芝土小屋に住んでいたという。手前の女性と子供たちは暗くてよく見えないが，背後の白い山が鮮やかに見える写真 9 に映るのは，ムラ人たちが名づけてくれたという Mt. Oka（マウント オカ）である。この写真も雪が多く残っているため第二次調査時のものと思われる。今のムラ人たちにも Mt. Oka は記憶されていると聞く。

写真 10 の宿舎のキャビンの前に立つ右のふたりは記録映画・報道班の 2 名であろう。『アラスカ』（渡辺他編 1961）冒頭の写真によれば東映カメラマンの松田忠彦と読売新聞記者の片柳英司と思われることから第一次調査のものである。キャビンは米海軍極北医学研究所の施設である。写真 11 はキャビン内で談笑する団員たちである。中央に蒲生がいるので 1962 年の第二次調査時の写真であることがわかる。左端が岡，右のふたりがカメラマンの渡部（遠征時は平凡社嘱託）と野呂（日本テレビ映画部員）と思われる。残念ながら，どちらが渡部でどちらが野呂かは特定できない。渡部は翌年写真展を開いたようだが，だいぶ後になって『アラスカ エスキモー』（渡部 1979）という写真集を出しており，蒲生は「エスキモーの友人たち」（蒲生 1979: 114–116）という一文を寄せている。

写真 9　Mt. Oka とムラ人たち（DiPLAS より）。撮影日・撮影者不明。

写真 10　宿舎の前に立つ第一次調査団のカメラマン松田と読売新聞記者の片柳（DiPLAS より）。撮影日・撮影者不明。

写真 11　談笑する調査団（DiPLAS より）。左から岡，蒲生，カメラマンの渡部，野呂。撮影日・撮影者不明。

（2）第三次調査時のアナクトヴック・パス訪問（1967 年）（写真アルバムより）

この時の調査は第三次調査として，蒲生団長の下，岡田，宮岡が南西アラスカ・ネルソン島を中心に調査したものであるが，予算の大部分は文部省科学研究費を活用している（明治大学 1966）。宮岡は，南西アラスカのエスキモー語であるユピック語を専門としており，この時はじめて調査団に参加したのだが，この年から 2 年間アラスカ大学で研究することになる。一方，岡はこの調査団のメンバーにはなっておらず，8 月上旬から下旬にアナクトヴック・パス，ポイント・バローを訪問したものと思われ，写真アルバムにネルソン島の写真はない。調査団はネルソン島での調査後，8 月下旬頃，全員がアナクトヴック・パスを訪問しているため，おそらくアナクトヴック・パスで岡に合流する計画になっていたのであろう。

写真 12 はムラの風景で，まだ芝土小屋が多く見られる。背景は他の写真でみるのと角度が異なるように見えるが Mt. Oka であろうか。写真 13 に映るように，驚くことに芝土小屋を改造したようなコーヒーショップが出現しており，いくぶん近代化の波が押し寄せてきているのがわかる。1960 年代末期あたりを境として，アラスカ・エスキモーの生活は目を見はるような変化がおこってきたという（蒲生 1979: 115）。写真 14 は，岡とムラの年配の男性で，何かの現場を案内してもらい聞き取りなどの作業を終えたところなのだろう。岡は小脇にノート類をかかえている。写真 15 は宿舎としていたキャビンの前に集合したムラ人たちである。こうしていつもムラ人たちが集合していたのであろう。写真 16 に映るのは，

写真 12　ムラの風景。撮影日・撮影者不明。

写真 13　芝土小屋のコーヒーショップ。撮影日・撮影者不明。

写真 14　岡（左）とムラの男性。撮影日・撮影者不明。

写真 15　宿舎の前に集合したムラの人たち。撮影日・撮影者不明。

写真 16　極北研究所のフィールドオフィス。撮影日・撮影者不明。

ツンドラのなかで真っ白な建物が目立つが，極北研究所のフィールドオフィス（Arctic Research Laboratory Field Station）である。第一次・第二次調査時にはなかったものだが，次回訪問の 1973 年以降，岡はここを宿舎にしている。

(3) 1973 年のアナクトヴック・パス訪問（写真アルバムより）

岡が 75 歳と高齢のためだろうか，この時は娘のあづさ氏とアナクトヴック・パスを訪問している。8 月はじめにアラスカ入りし，南東アラスカからフェアバンクスを経てアナクトヴック・パスを訪れているが，どれほどの期間滞在したのかは不明だ。あづさ氏から自宅に送られた葉書が残っており，父娘の珍道中ぶりがうかがえてほほえましい。まず驚くことには，芝土小屋に代わり木造家屋が多く見られることである（写真 17）。ムラの光景が一変していることがわかる。写真アルバムには “Anaktuvuk Pass の近代化 ” とタイトルされたページがある。そこには，スノーモービルやバギーが登場している様子が写されている（写真 18・19）。一方で，同じアルバムに犬ぞりが写っている写真があり，何とも奇妙である。また，木造の教会堂，郵便局が見られ，ムラの主要な施設がことごとく新築されたものと思われる（写真 20・21）。それでもわずかに残された芝土小屋に，「Sod House 2 ～ 3 残る」というキャプションがつけてあり，芝土小屋がどれだけ残っているかが逆に近代化の指標と思われたようだ（写真 22）。

写真 23 に写っているのは，1967 年に既に設置されていた米海軍の施設だが，1973 年から岡はこの施設を宿舎にしている。宿舎の前の岡は 75 歳とは思えない

写真 17　木造家屋が見られはじめたムラ。
撮影日・撮影者不明。

写真 18　スノーモービルが見える。撮影日・撮影者不明。

写真 19　10 輪のバギーが見える。撮影日・撮影者不明。

写真 20　「教会堂」（写真アルバムのキャプションより）。撮影日・撮影者不明。

写真 21　「Post Office」（写真アルバムのキャプションより）。撮影日・撮影者不明。

写真 22　「Sod House 2 ～ 3 残る」（写真アルバムのキャプションより）。撮影日・撮影者不明。

写真 23　1973 年以降宿舎にしていた極北研究所の施設と岡。撮影日・撮影者不明。

ほど凛としていて，フィールドワーカーとしてのたくましさを感じる。

なお，この年のアルバムには「大貫君」という人物が登場する。「大貫君」は，1975 年，1977 年のアルバムにも登場しており，1977 年にはアナクトヴック・パスをも訪問している。この頻繁にアルバムに出てくる「大貫君」とは，あの古代アンデス文明研究者で，現在，野外民族博物館リトルワールド館長の大貫良夫であった。当時，岡は開館前のリトルワールドの理事のひとりであったという。大貫は北西海岸先住民のトーテムポールと家屋をリトルワールドに建設すべく，岡のアラスカ行に同行し，南東アラスカを訪れていたのである[14)]。既に第一次調査時に岡が知り合っていた C. W. ハインミラー（C. W. Heinmiller）という人物を現地の窓口とし，トーテムポールと家屋の製作について相談していたようだ。ハインミラーは，現地で民俗資料の陳列館をもち，北西海岸先住民のトリンギットの踊りや民芸品製作所を指導していたという（明治大学 1960b: 19）。

（4）1975 年のアナクトヴック・パス訪問（写真アルバムより）

1975 年のアナクトヴック・パスの訪問時 77 歳の岡は，今度は息子の岡千曲と出かけている。アナクトヴック・パスは千曲氏にとってはじめての訪問であった。アルバムに残された行程メモによれば，7 月 25 日にアンカレッジ入りし 8 月 30 日帰国しており，全体で約 1 ヶ月の旅だったようだ。南東アラスカの各地を訪れた後，フェアバンクス，ポイント・バローを経て，8 月 12 日から 23 日までの 10 日間あまりをアナクトヴック・パスで過ごしている。南東アラスカでは，大貫と前述のハインミラーが登場しており，アン川（Ann creek）で鮭鱒釣りを楽しみ，チルカット湖（Chilkat lake）なども訪れている。

1975 年の訪問時のアルバムには，プリント写真を貼り合わせ，西の台地から見たアナクトヴック・パス全景がパノラマ風に収められている（写真 24）。秋のツンドラの上にこぎれいな木造家屋がまばらに見える。また，ムラ人たちとチャンドラー湖（Chandler lake）へピクニックに行った写真などを含め，ムラの日常が写真に収められている。写真 25 は，Mt.Oka とともによく登場する Soapak Pak（「がみがみ女」という意味だという）という山と “Nunamiut” Store である。Store は新しそうな建物でこのコミュニティとしてはやや大きな店だ。近代化の，あるいは伝統の残存の指標というべきか，1973 年のものと同じように，このアルバ

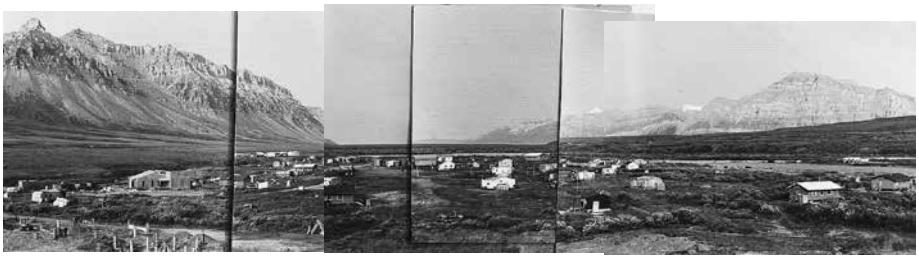


写真 24　アナクトヴック・パス全景（プリント写真が貼り合わされている）。撮影日・撮影者不明。

写真 25　「Soapak Pak と “Nunamiut” Store」
（写真アルバムのキャプションより）。
撮影日・撮影者不明。

ムにも「芝土小屋，2，3，残る」とのメモが残されている。千曲氏は，この時，Mt. Oka を覆うように虹がかかったことを今でもよく覚えているという。

また，このアルバムには「8 月 23 日 アナクトヴック・パスを発つ。サイモンとの最後の別れ」とのメモだけが残されていて写真がないものがある。『季刊どるめん』所収の「サイモン・パニアックの一生」に「サイモン・パニアックと別れの握手をする筆者（1975 年，これが最後の握手となった）」（1979a: 29）としてふたりの写真が掲載されているので，おそらくこのアルバムにあった写真なのであろう。この旅からの帰国後の 9 月 20 日，後述するように，岡はパニアックが 9 月 18 日に逝去したとの電報を受けている。アナクトヴック・パスで知り合った人から手紙で知らせを受けるとともに，アンカレッジ歴史芸術博物館（Anchorage Historical and Fine Arts Museum）からはパニアックをしのぶ新聞記事が送られている。

（5）1977 年のアナクトヴック・パス，および，ポイント・バロー訪問（写真アルバムより）

岡 79 歳の最後の訪問は妻の澄子氏が同行しており，この時のアルバム数が 10 冊と最も多い。5 月 25 日にアンカレッジ入り，ポーテージ氷河（Portage Glacier）などを訪れ，フェアバンクスで生物学者のローレンス・アーヴィング（Laurence Irving）に会っている。そして，30 日にアナクトヴック・パス入りして 10 日間ほどを過ごしている。その後，6 月 11 日にポイント・バローに移動，19 日にアンカレッジを発ち帰国の途についている。

アナクトヴック・パスでは，野の花を摘んだり，ムラ人との交流を楽しんだりと，のんびりとしたほほえましい光景が写真に収まっている。ここでは，そのなかでもムラの様子がわかる写真を選んだ。なお，「大貫君」はここにも登場し，ムラ人と写った写真がある（写真 26）。大貫は，民俗資料収集のため後でひとりでアナクトヴック・パスに戻ったこともあったという（大貫談：2022 年 12 月 9 日）。なお，「アラスカ 1977 大貫氏寫す」という 1 冊があり，大貫が写真をアルバム 1 冊にまとめて岡に贈ったものかと思われる。

写真 27 はムラ全体の様子で，左端には芝土小屋が見える。後方に見えるのは Soapak Pak であろうか。昔ながらのカリブーの毛皮が干されている様子もある（写真 28）。写真 29 に映るのは，なおも健在する芝土小屋である。半ば木造風でもあり，改造して使用していた家屋のように思われる。

岡自身が写る写真もいくつかある。ムラを見下ろせる石に腰を下ろして遠くか

写真 26　アナクトヴック・パスの大貫（右）。撮影日・撮影者不明。

写真 27　ムラ全体の様子。撮影日・撮影者不明。

写真 28　干されているカリブーの毛皮。撮影日・撮影者不明。

写真 29　芝土小屋。撮影日・撮影者不明。

写真 30　ムラを眺める岡。撮影日・撮影者不明。

写真 31　友人宅を訪問する岡。撮影日・撮影者不明。

らムラを眺める岡や（写真 30），各家庭を訪問して談笑している岡の様子もある（写真 31）。家屋の内部を見ると既に現代的な家庭の様子がうかがえる。久方ぶりに旧知の友人と語らう姿もある（写真 32）。他の類似写真から，第一次調査からのムラの友人のひとり，Kakinya という男性かと思われる。写真 33 は妻澄子氏との数少ないツーショットである。

この年は，高齢のため妻に同行してもらうとともにアナクトヴック・パスを妻に見せ，のんびりとムラでの生活を楽しむことが主な目的だったかと思われた。しかし，そればかりではなかった。そのひとつが，6 月 13 日にポイント・バローで開催された第 1 回周極イヌイット会議（Inupiat Assembly）の傍聴であった（写真 34・35）。なぜそれがわかったかというと，類似した写真が宮岡の著書『エスキモー――極北の文化誌』（1987: 183）に掲載されているからである。同年から再

写真 32　ムラの友人と話す。撮影日・撮影者不明。

写真 33　妻澄子氏と岡。撮影日・撮影者不明。

写真 34　ポイント・バローで開催された第 1 回周極イヌイット会議。1977 年 6 月 13 日，撮影者不明。

写真 35　宮岡（左）と岡（中央），第一次調査からのポイント・バローの知人 Vincent Nageak と思われる。1977 年 6 月 13 日，撮影者不明。

度アラスカ大学での研究に従事することになっていた宮岡と調整した上でこの周極イヌイット会議に参加したのではなかろうか。写真 36，37 については，アルバムの表紙に「鯨祭り（Pt. Barrow）1977 may」とあるから，会議の開催地であるポイント・バローで，たまたまクジラが捕れて開かれたクジラ祭りを見学することができたのであろう。

（6）1984 年のアナクトヴック・パス訪問（写真アルバムより）

岡は 1982 年に他界したのだが，自分が亡くなったら，郷里の信州・松本，ウィーン，それからアナクトヴック・パスの 3 か所に分骨せよとの遺言を残していた。このアルバムには，妻の澄子氏と娘あづさ氏が納骨のために訪問した時の

写真 36　クジラ祭りに集まる人々。撮影日・撮影者不明。

写真 37　クジラ祭りで鯨を解体する夫婦。撮影日・撮影者不明。

写真 38　Mt. Oka をのぞむ共同墓地の岡の墓。撮影日・撮影者不明。

写真 39　ルーズベルト・パニアック。撮影日・撮影者不明。

写真が収めてある。岡のお墓は，Mt. Oka をのぞむ手前の平坦なツンドラの地にある。お骨を納める穴を掘っているのは，岡の友人サイモン・パニアックの息子・ルーズベルトである（写真 38・39）。周囲の墓標にも花がたむけられている。岡のかつての友人たちの墓なのであろう。1984 年 7 月，岡は，今は亡きアナクトヴック・パスの友人たちとともに眠りについたのだ。ルーズベルト・パニアック家で食卓を囲む澄子氏の写真もある（写真 40）。ムラには真新しい木造家屋ばかりが立ち並ぶ（写真 41）。ムラを発つ飛行機に搭乗した澄子氏とあづさ氏に手を振るパニアック家の人たちである。背後にはどっしりと立つ Mt. Oka が見える（写真 42）。

写真 40　澄子氏，ルーズベルト・パニアック家にて。撮影日・撮影者不明。

写真 41　ムラの様子。後方は Soakpak Pak。撮影日・撮影者不明。

写真 42　澄子氏らを見送るパニアック家の人たちと Mt. Oka。撮影日・撮影者不明。

6　岡と「ヌナミウト」

6.1　専属インフォーマント―サイモン・パニアック

1960 年の明治大学アラスカ学術調査団にはじまり 1977 年の最後の訪問まで，岡はアナクトヴック・パスに通算で 7 回通っている。アナクトヴック・パスの何が彼をそこまで惹きつけたのだろうか。ここから，岡とアナクトヴック・パスに住むヌナミウトの人々との関係を資料から読み解いていきたい。

岡には，サイモン・パニアックという 1960 年の第一次調査以来のインフォーマントがいた。パニアックは 1900 年 4 月にキリック川（Killik river）の春のキャンプ地で生まれたという。岡が 62 歳，パニアックが 60 歳の時にふたりは出会い，1975 年にパニアックが亡くなるまで交流は続いた（写真 43 ～ 45）。

岡はパニアックについて，定住生活への移行と白人社会との接触に際し，ヌナミウトを代表する人物として「決定的な役割を果たした先駆的指導者」（岡 1979a: 8）だと評している。また，「村第一の物識りで，その名声は遠く海岸エス

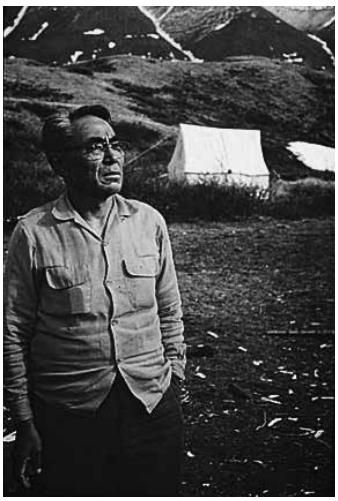


写真 43　サイモン・パニアック（DiPLAS より）。撮影日・撮影者不明。

写真 44　サイモン・パニアックとその家族（DiPLAS より）。撮影日・撮影者不明。

写真 45　1973 年の訪問時のパニアック（写真アルバムより）。撮影日・撮影者不明。

キモーの間にまで知られた卓れた伝承者であり，英語も相当達者で，驚くべき記憶力の所有者であった」（岡 1979a: 8），「私のノートの大半は，彼からの資料で充たされている」（岡 1979a: 8）と語るほど彼を尊敬している様子がうかがえる。岡が彼を深く信頼し，畏敬の念さえもっていたことがよくわかるのが，パニアックの鳥に関する知識量についての記述である。パニアックは，ポイント・バローにある極北研究所の生態調査に協力するために，鳥の標本作りのために鳥類の捕獲や卵の採集を手伝い，鳥の移動などについて生物学者のアーヴィングに報告していた。岡はパニアックの鳥に関する知識が，驚くばかりに豊富で科学的だと評し，鳥の鳴き声や，動物の叫び声の真似のうまさは芸術品であるとさえ書き残している（岡 1979a: 20）。

岡千曲は，パニアックと父岡正雄との関係には特別なものがあったと述べている。人に頭をさげたり，謙虚にへりくだったりということをしてこなかった岡が，「サイモンとの関係は，私などから見ていても親しくはあっても馴れ馴れしすぎず，相当の敬意を払っていたように見受けられた。『パニアックと会っていると何となく圧倒される』というようなことを漏らしていた。人と会っても物怖じせず，屈託というもののなかった岡にしては相当のことである」（岡 2007: 18）と，驚きをもって見ていたようだ。

1975 年 9 月 18 日のパニアックの訃報の際には，岡はアラスカから電報を受け取り，また息子のルーズベルトからも訃報の手紙を受けとっている（写真 46・47）。岡も 9 月 20 日には弔電を送ったようで，その原稿が残されている（写真 48）。これらは全てアルバムに綺麗に貼られていたものだ。パニアックの死後は，息子のルーズベルトを日本に招いたりと，我が子のように接していた（岡 2007: 19）。岡とパニアックがどれほど親しく深い関係にあったかがわかる。

6.2　岡とヌナミウトとの関わり

岡はパニアックとの交流を通して，白人社会との接触と，移動生活から定住生活への移行のなかで，ヌナミウトが直面していた激変を我が事のように受け止めていくようになっていった。白人社会との接触によって失われていく歴史や文化に相当な危機感をもっていたようだ。ムラの学校を見学した際の違和感を次のように吐露している。

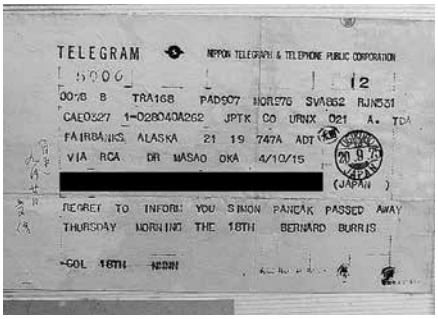
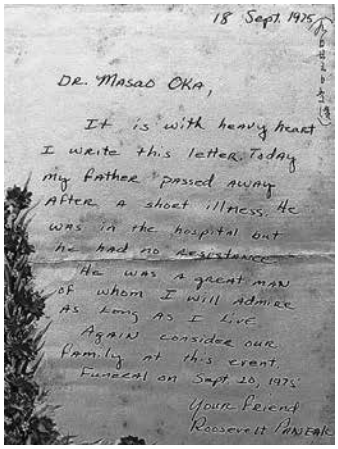

TELEGRAM　NIPPON TELEGRAPH & TELEPHONE PUBLIC CORPORATION
5000　12
0078 B　TRA168　PAD907　NOR276　SVA852　RJN531
CAE0327 1-028040A262　JPTK CO URNX 021 A. TDA
FAIRBANKS, ALASKA　21 19 747A ADT
VIA RCA　DR MASAO OKA　4/10/15
[redacted]　(JAPAN)
REGRET TO INFORM YOU SIMON PANCAK PASSED AWAY
THURSDAY MORNING THE 18TH　BERNARD BURRIS
-COL 18TH NOON

写真 46　サイモン・パニアックの訃報を知らせる電報（写真アルバムより）。2022 年 3 月 28 日，碇陽子撮影。


18 Sept. 1975

Dr. Masao Oka,

It is with heavy heart I write this letter. Today my father passed away After a short illness. He was in the hospital but he had no resistance.
He was a great man of whom I will admire as long as I live.
Again consider our family at this event.
Funeral on Sept. 20, 1975
Your Friend
Roosevelt Paneak

写真 47　息子，ルーズベルトからのパニアック訃報の手紙（写真アルバムより）。2022 年 3 月 28 日，碇陽子撮影。

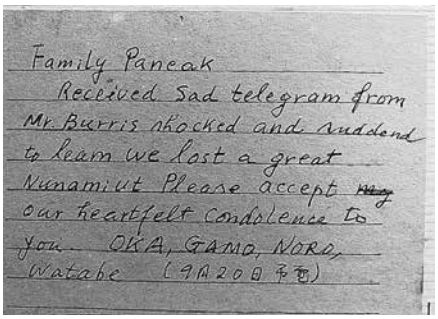

Family Paneak
Received Sad telegram from Mr. Burris shocked and suddend to learn we lost a great Nunamiut Please accept ~~May~~ our heartfelt condolence to you. OKA, GAMO, NORO, Watabe (9月20日葬儀)

写真 48　弔電の原稿（写真アルバムより）。2022 年 3 月 28 日，碇陽子撮影。

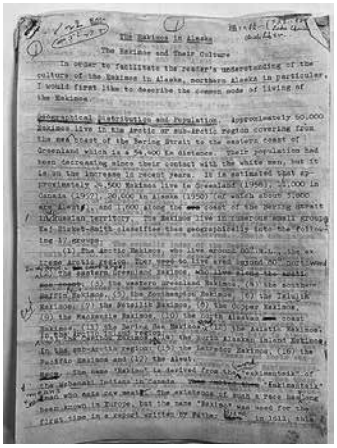
> 1961 年，村に小学校ができたが，当時歴史の時間をきかしてもらったことがある。教えることはアメリカ史で，ワシントン，リンカーンの歴史など，私は違和感を感じた。ここの人もアメリカの市民であるからアメリカ史を学ぶのは当然であるが，エスキモーにはエスキモーの歴史がある。パニアック老にこのことを話し，あなた時々学校で子供たちにエスキモーの歴史の話をしたらといったことがある。パニアックは，エスキモーの歴史とは何かと聞き返したので，僕が毎日きみから聞いて書き取っている Old Story が歴史だ。あなたも子供や若い人にかつての移動の話，先祖の話，狩猟の話，道具の作り方などを話しておかないと，彼らはもう何も昔の話を知らなくなってしまう。そしてただ二，三の本や私のノートに残るだけになってしまうだろうと話したことがある（岡 1973）。

岡は，岡千曲にもヌナミウトの将来の不安を語っていたようで，岡が「白人の教師ばかりの授業でアメリカ史を教えてもしょうがない」と語っていたこと，また，「エスキモーの教師が教壇に立って自分たちの過去を教えなくてはならない」

と現地の人々に助言したこともあった（岡 2007: 18）と書いている。上の新聞記事のなかで，エスキモーの歴史が「ただ二，三の本や私のノート」に残るだけになってしまうと危機感を示しているが，岡千曲によると，「自分の調査報告もその参考にしてもらいたいと『アラスカ』の岡の執筆部分（「極北の人々」）を私の叔母室田和香子にかなりの執着で強引に頼み込んで英訳タイプしてもらい，アナクトブックに送った」（岡 2007: 19）とある。おそらくそれだと思われる書き込みのなされた原稿のドラフトが残っている（写真 49）。

特に，アナクトヴック・パスの未来を担う子どもたちへの思いは相当なものだったようだ。シトカというアラスカの南東にある都市のマウント・エッジカム高校に通っているアナクトヴック・パスの子どもたちを訪問したときの写真が 1973 年のアルバムのなかに残されている（写真 50）。わざわざ子どもたちを訪ねたのか，何かのついでに立ち寄ったのかは定かではないが，写真のキャプションには「Sitka の Mt. Edgecumbe の High School に勉学中の，Anaktuvuk Pass の少年少女に会う」と書かれていた。

1975 年のアルバムには，数人の笑顔の子どもたちの後ろに立つ岡の写真が残されている（写真 51）。また，アンカレッジから送られたと思われる電報の原稿


The Eskimos in Alaska

The Eskimos and Their Culture

In order to facilitate the reader's understanding of the culture of the Eskimos in Alaska, northern Alaska in particular, I would first like to describe the common mode of living of the Eskimos.

Geographical distribution and population. Approximately 60,000 Eskimos live in the Arctic or sub-Arctic region covering from the east coast of the Bering Strait to the western coast of Greenland which is a 54,400 Km distance. Their population had been decreasing since their contact with the white men, but it is on the increase in recent years. It is estimated that approximately 45,500 Eskimos live in Greenland (1968), 17,000 in Canada (1972), 20,000 in Alaska (1950) (of which about 5000 are living [illegible] and 1,000 along the [illegible] coast of the Bering Strait in Russian territory). The Eskimos live in numerous small groups. Kai Birket-Smith classified the geographically [illegible] the following 17 groups:

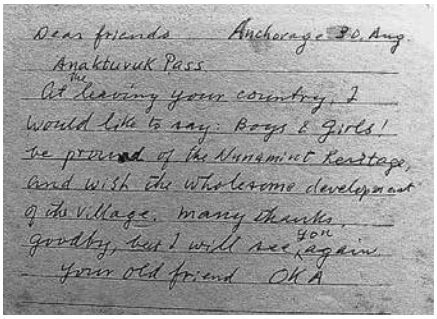
(1) the Arctic Eskimos, who live around 80° N.L., the extreme Arctic region. They seem to live area around 80° northward. (2) the Eastern Greenland Eskimos, who live along the east coast of Greenland. (3) the western Greenland Eskimos, (4) the southern Baffin Eskimos, (5) the Southampton Eskimos, (6) the Iglulik Eskimos, (7) the Netsilik Eskimos, (8) the Copper Eskimos, (9) the Mackenzie Eskimos, (10) the [illegible] in Alaska [illegible] coast Eskimos, (11) the Bering Sea Eskimos, (12) the Pacific Eskimos, (13) the Aleut, the Aleutian Islands Eskimos, (14) the sub-Arctic region, (15) the Labrador Eskimos, (16) the Pacific Eskimos and (17) the Aleut.

Note: The name "Eskimo" is derived from the "[illegible]" of the aboriginal tribes in Canada. [illegible] "Eskimo" [illegible] that was now used. The existence of such a race became known in Europe, but the name "Eskimo" was used for the first time in a report written by Fathe[illegible] in 1613, this

写真 49　書き込みがされた『アラスカ』の英訳のドラフト。2022 年 3 月 28 日，碇陽子撮影。

写真 50　「Sitka の Mt. Edgecumbe の High School に勉学中の，Anaktuvuk Pass の少年少女に会う」（1973 年の写真アルバムのキャプションより）。撮影日・撮影者不明。

写真 51　子どもたちと岡（1975 年の写真アルバムより）。撮影日・撮影者不明。



Dear friends　Anchorage 30 Aug.
Anakturuk Pass
At the leaving your country, I would like to say: Boys & Girls! be proud of the Nunamiut Heritage, and wish the wholesome development of the village. many thanks, goodby, but I will see you again
Your old friend　OKA

写真 52　「親愛なる皆さん，アンカレッジ 8 月 30 日 アナクトヴック・パス
帰国の途につくにあたって，是非とも言っておきたいことがあります。少年・少女たちよ，ヌナミウトの伝統に誇りをもち，ムラの健全な発展を願いましょう。ありがとう。さようなら。また会いましょう。古くからの友人，岡より」（1975 年の写真アルバムより）。2022 年 3 月 28 日，碇陽子撮影。

も残されていた。英語で「帰国の途につくにあたって，是非とも言っておきたいことがあります。少年・少女たちよ，ヌナミウトの伝統に誇りをもち，ムラの健全な発展を願いましょう。ありがとう。さようなら。また会いましょう。古くからの友人，岡より」（写真 52）と書かれている。推測の域を出ないが，1975 年の第 6 回目の訪問の帰国の際に，経由地のアンカレッジからアナクトヴック・パスに電報を送ったのではないだろうか。これらの写真資料からは，ヌナミウトの少年少女の未来を案じ，激変する社会に生きる子どもたちをなんとか応援したいという岡の思いが伝わる。

白人社会との接触による文化の喪失，貨幣経済の浸透と現金収入を得る大変さ，原住民の土地を原住民に割り当てて与える法律（ANCSA: Alaska Native Claims Settlement Act）の成立，開発に追われる住民など，かれらが直面している状況に危機感を抱いていたことは岡の執筆したものから理解できるが（例えば，岡 1961a），写真資料からはそうした状況にあるかれらを案じ励まそうとしていたことを読み取ることができる。白人社会との接触を契機に，移動する狩猟民が定着化するヌナミウトの社会変化を，岡は，日本の明治維新の若者が直面し，切り開いた状況にたとえていたという。サイモン・パニアック亡き後は，明治維新

の若者として，息子のルーズベルトにヌナミウトの将来を期待したという（岡 2007: 19）。カリフォルニアのカレッジで勉強して帰ってきたルーズベルトが，岡に，「日本人のあなたやアメリカ人がきて，われわれを調査・研究する。だが，われわれがわれわれ自身を研究するようにならなきゃいけない。それでソシオロジーと人類学を勉強した」と言ったとき，岡は大変感動したと述べている。植民国の学者を通じて自分たちのことを知るのではなく，自分たちのことを自分たちの手で知るようにならなければいけない。世界の各地でそういう考えが生まれてこなきゃいけないと思う，という言葉を残している（岡 1979d: 408）。

岡は第 8 回目のアナクトヴック・パス訪問を計画していたようだ。明治大学大学史資料センターに残された岡のアルバムには，新聞名不明の 1978 年 3 月 24 日の新聞の切り抜き記事が収められている（新聞名不明「学究 79 歳北極圏へ単独行：エスキモー研究：学問にトシはない」1978 年 3 月 24 日）。その記事によると，岡は 1978 年 4 月から 8 回目のアラスカへ渡航する予定であるという。1978 年 6 月に 80 歳になる岡の単独渡航には，家族のものも心配したに違いない。岡は「滞在は約 1 ヶ月。ちょうど白夜が始まる頃までいる予定だ。心配する家族には，『向こうの人たちの方がよほど大切にしてくれるよ』といって笑いとばしている」と豪語していたようだ。だが，結局この渡航は実現されなかったようだ。さぞかし悔やんだであろう。1982 年に亡くなるまで，岡がアラスカの土地を踏むことはもうなかった。

岡がなぜこれほどまでにヌナミウトの人々にこだわり，ムラの未来に期待したのか。岡の生まれ育った内陸の信州と関係があるのではないかという人もいる。確かに，岡は，アラスカ・エスキモーの人々の厳しい寒さから身を守る暮らしの合理性について語る時に，自身の郷里の信州を思い出すと述べているから（岡 1979d: 409），ヌナミウトの人々に信州の人々と同じものを見出し，愛着をもったのかもしれない。また，岡千曲によると，岡はヌナミウトの人々の誇り高い生き様を愛し，かれらとの「つきあいそのものに強く惹かれていた」のだという（岡 2007: 18）。いずれにしろ，その真意は知る由もないが，ここまで紹介してきた資料からわかるように，岡は，最後までアナクトヴック・パスというフィールドにこだわり続けた。

7　岡とヌナミウトとフィールドワーク

7.1　フィールドワークに対する姿勢

現代の人類学界の，特に若い世代の学徒にとって岡のイメージといえば，日本民族学・人類学の創成の立役者であり，大局的見地から様々な場所の文化の痕跡をたどり，文化形成を論じた学者というものであろう。考古学や自然人類学，言語学などの様々な学問的手法を組み合わせて日本の基層文化を論じた，もはや偉人の域に入る人物である。その研究方法は，長期的なフィールドワークを通して現地の人のものの見方を学び，個別具体的な民族誌を書くことを基本とする現代の人類学とは，調査方法においても，思考法においても大きく異なるように思える。そのため，明治大学アラスカ学術調査団への参加以降の資料を整理する過程で，岡がアナクトヴック・パスにこだわり，足繁く通いつづけ，現地の人々との関わりを大切にする姿に，著者のひとりである碇は正直にいうと驚いた。なぜなら，岡にフィールドワーカーというイメージがなかったからだ。ところが，資料整理のなかで見えてくる岡正雄像は，まさにフィールドワーカーだった。

岡自身が，現地の人々と関わる際の自身の態度について語っているものがある。それを読むと岡自身がどのようなフィールドワークを理想としていたのかがよりはっきりと明らかになる。例えば，第一次アラスカ学術調査団を組織した時の調査の仕方について話すときに，以下のように語っている。

> 私は調査（research）ということばがいやなんですよ。相手にお前のところを調査しにいくとか，研究しにいくというのがね。それで私はお前たちのウェイ・オブ・ライフ（way of life）を「ラーン」（learn）しに行くということを最初の手紙に書いたです（ママ）。（中略）そんなことで僕は質問事項をつくってきちんとききだすような調査はしないんですよ。ただ雑談するだけ。だから向こうも気が楽らしくて，うちとけてくるんですね（岡 1979d: 409）。

また新聞記事にも調査という言葉が嫌だということが書かれている。「岡さんは，『調査』という言葉を嫌う。『学びに行く』といい，そう学生たちにも教えている。いくたびか現地入りをするうち，現地民もそんな岡さんと親しむようになった」と書かれている（新聞名不明「学究 79 歳北極圏へ単独行：エスキモー

研究：学問にトシはない」1978 年 3 月 24 日）。

そのような岡のフィールドワーカーとしての姿勢について，彼に同行した研究者らも驚きをもって語っている。例えば，宮岡は「けっして調査者と被調査者という関係にご自分をおこうとなさら」ず，「いつも『エスキモーに教わりに行くのだ』とおっしゃっておられた」（宮岡 1987: 12）と回顧している。パニアックと仕事をしている様子を聞いていた宮岡が，「情報のやり取りを超えた，深いラポールを感じざるをえなかった」（宮岡 1987: 12）と書いていることからも，岡が現地の人と心を通い合わせ，信頼関係を築いていたことが，傍目からもうかがえたことがわかる。

岡と一緒にアラスカのアナクトヴック・パスで調査をしている岡田宏明は，岡の「インフォーマントから話を引き出すことの巧みさに大変驚いた」（岡田 1983: 25）と書いている。岡がムラを訪れるとムラ中の人たちが集まり，親しい友人として歌と踊りで歓迎される。近くの山には Mt. Oka という名称までつけられていた。それを見て「現地の人たちからこれだけ深く愛されていれば，だれもが喜んで質問に応じてくれるのは当然のことである。先生の巧みな話術の背後には，エスキモーとのかたい心の絆があった」（岡田 1983: 25）と感嘆している。また，祖父江も，岡は文献調査しかしない研究者のように思われるかもしれないが，「フィールドワークも実にお上手」であったという。岡はエスキモーのあいだでは「岡先生，オカ，マサオ・オカ」と，誇張ではなく「大変な人気者」（祖父江 2013: 39–40）だったと述べている。

7.2　フィールドワーカーとしての岡正雄像

こうした記録からわかるのは，岡は，現地に入り込んで一方的に聞き出しデータ収集をするというタイプの調査者ではなく，現地の人から教わり学ぶという姿勢をもち続けてフィールドワークをした人物だったということだ。「教わりに行く」という姿勢からは，岡がフィールドワークを単に文化についての理論構築のためのデータ収集の手法として位置づけていたわけではないことがわかる。

人類学におけるフィールドワークの必要性について岡がどのように考えていたかは，文化人類学者の西村朝日太郎が明らかにしている。西村自身は，文化人類学には，フィールド研究とは別に，理論研究を進める分野が必要だと感じていた

という。つまり，フィールドで個別的で実践的な民族誌的研究をする分野と，それらの民族誌的な資料に基づいて，共時的，通時的な文化の理論的研究を進め，（社会学に対応するような）文化学を確立する必要性があり，そのことを主張していたという（西村 1988: 166）。西村が 20 代の頃からあたためていたこのアイデアに対し，石田英一郎は文化の理論的研究に専念する人類学者があって然るべきだと賛同したという。しかし，岡からは，文化人類学におけるフィールド研究の意義について意見交換をするなかで，「淡々」と反対されたことを明かしている。岡は文化をグローバルに研究しなければならない民族学者（文化人類学者）にとっては，自分たちが生活している時間や空間における生活体験は必然的に限られているため，本質的に，西欧文化とは異なる文化内生活体験，つまり，フィールド研究が不可欠だと答えたという。自分が独自のフィールドの領域をもてば，独自の民族誌的資料を得られる。それによって，自己の文化理論を強化でき，民族学者として独自の発言も可能になると考えた。これにより，西村の文化学の確立という計画は再考を迫られたという（西村 1988: 167）。

このことに関連して，岡田淳子は，岡がアラスカに通い続けた理由は，自分の地域的フィールドを確立したいと思っていたからではないかと述べている（岡田 2010: 5）。もちろんそこには自分のフィールドをもつことへの憧れもあったようではあるが，それだけではなかったと推察している。それは当時の民族学と考古学の関係に関わる問題が影響している。岡が活躍した頃の民族学は考古学研究と親和性があった（吉田 2023）。日本列島以外からの文化の流れを見るためには，考古学的な発掘調査が重要だと考えていたからだ。ところが，当時のほとんどの日本の考古学者は文化進化論者であった。そのため岡は，日本の考古学者が物質資料の変化（進化）にのみ注目し，内的な発展のみを追求し，社会を見ていないことに不満を漏らしていたという。岡はそうした問題に切り込むために，自身のフィールドが必要だったのではないかと推察している（岡田 2010: 5–6）。

前述したように，宮岡は，フィールドワークにおいて岡が現地の人々と深いラポールを形成していたことを記した後に，岡が「しかしそんなある日，『民族学は，きみ，言語から入らないと駄目だね』と漏らされたことがあった」と書いている（宮岡 1987: 12）。宮岡は，岡にその考えの意味をついぞ詳しく聞くことはできなかったと書いているが，おそらく，（英語ではなく）現地の言葉で，現地

の人々の生きる世界を理解したいというもどかしさを感じていたのかもしれない。フィールドワークをすればするほど，文化の流れを見るという当初の目的は薄らぎ，フィールドの人々とともにかれらの生きる今に対峙することにのめり込んでいったといっても過言ではないのかもしれない。

これらは，1980 年代に人類学界を震撼させた「ライティング・カルチャー・ショック」が訪れる以前のことである。ライティング・カルチャー・ショックでは，参与観察という調査手法に基づく人類学的手法が，調査者と被調査者の圧倒的な権力関係の差によって支えられていることや，観察者としての調査者の視点の客観性に対し疑義が提示された。人類学が植民地主義の産物と評されることも手伝って，調査対象者との関係，科学としての人類学という問題は，人類学に大きな課題として残された。岡自身，戦時期の民族研究所の設立が戦争の国策に組み込まれてしまった経験をもつことは確かだが（清水 2020; 中生 1997），その経験が調査対象者との関係性を振り返るきっかけになったか否かはもちろん定かではない。興味深いのは，岡はそうした論争が起こる遙か前から，現地の人と調査者と被調査者という関係ではなく，人間と人間の関係を築こうとする姿勢を貫いていたということだ。

今でこそイギリスの人類学者ティム・インゴルド（2020）などが，人類学とは人々についてのデータを集める研究というよりもむしろ，「人々とともに研究」することだと述べるが，それは岡の調査の姿勢そのものだ[15]。残念ながら岡がヌナミウトの民族誌を書くことはなかった。民族誌を書くことを目的にしなかったことがむしろ，岡が現地の人々とともに未来を考える姿勢を貫くことを可能にしたのだというのはいささか言い過ぎかもしれない。とはいえ，激変にさらされたヌナミウトの生に真摯に向き合い，ともに未来を考え続けることが自身の任務になっていったことは間違いないだろう。

8　おわりに

岡の晩年については，もっぱら「アラスカに夢中になった」という評価が下されがちではあるが，その全貌はよく知られていなかったように思う。もちろん，蒲生正男や祖父江孝男，岡田宏明，岡田淳子など，岡の近くにいた人たちにとっ

ては，岡が精力的にアナクトヴック・パスに通いフィールドワークを行っていたことはよく知られた事実ではあっただろう。しかしながら，本稿で明らかにしたような，アナクトヴック・パスでの活動，ヌナミウトの人々への思いやフィールドワーカーとしての姿勢は，あまり知られていなかったのではないだろうか。よく言われるように岡は寡作であり，第一次・第二次調査以降は研究成果と呼べるものをほとんど書いていなかったことも，そうした評価が生まれる要因のひとつであろう。本稿では，明治大学大学史資料センターに所蔵されている写真その他の資料をもとに，還暦後に新たなフィールドに向かった岡の軌跡を辿ってきた。それにより，岡が最後の 20 年をアラスカのアナクトヴック・パスに捧げ，ヌナミウトの人々とともにあった人類学者であったことが明らかになった。日本の人類学の礎を築いた岡の，現地の人々と真摯に向き合おうとするフィールドワーカーとしての姿勢から，われわれは何を学べるだろうか。

謝　　辞

本稿で扱った資料の一部は，日本学術振興会の科学研究費補助金研究新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（プラットフォーム「地域研究画像デジタルライブラリ（略称 DiPLAS）」）から支援を受けて資料整理を行いました。本稿を執筆する上で種々ご教示を賜った岡千曲先生と岡田淳子先生，大貫良夫先生，その他，資料整理に関係してくださった皆様に厚くお礼申し上げます。

注

1）　本稿は，2022 年 6 月 4 日に開催された日本文化人類学会第 36 回研究大会（於：明治大学）の開催校シンポジウムにおいて発表した内容，およびその後に確認した事項に基づいて執筆したものである。なお，岡正雄をはじめ岡にかかわった研究者等，登場人物の氏名については敬称を略させていただく。

2）　ヨーゼフ・クライナーは，1979 年の岡の学説を解説した論稿（クライナー 1979）を皮切りに，上記開催校シンポジウムにおける発表に至るまで，岡が滞在していた頃のウィーンにおける学風，近代の日本意識における岡の位置づけをはじめ，岡に関連して，また岡が生きた時代の思想的背景につき幅広く論じてきた人物である（クライナー 2013 など）。また現在，岡を論じる際には清水昭俊，中生勝美の諸論稿につき言及することが多い（清水 2020; 中生 2013 など）。

3）「ヌナミウト」とは「陸の民」，「内陸の民」の意味である。但し，本稿では，かつて北アラスカの内陸を移動して生活し，1950 年までに定住したムラであるアナクトヴック・パスの住民を指す。なお，岡の 1960 年代から 1970 年代の調査活動を紹介することから，混乱を

避けるため，ヌナミウトを含むエスキモー全般を指すときは「エスキモー」の名称を使用することをお許しいただきたい。また，北アラスカのエスキモーは自らをイヌピアック（Inupiak），中西・南西アラスカのエスキモーは自らをユピック（Yup'ik）と称している。「エスキモー」の名称を避けるために，あるいは「イヌイット」の名称が一般に知られているという理由からか，アラスカのエスキモーをも「イヌイット」と称することがあるようだが，これは誤りである。

4）　これらの写真は，岡正雄の息子である岡千曲より明治大学に寄贈されたものであり，写真の著作権者は岡千曲である。DiPLAS によりデジタルアーカイブ化された写真は 1960 年と 1962 年のアラスカ渡航時のものである。写真 1 に映る 17 冊のアルバムは，1967 年のアルバムが 1 冊，1973 年のアルバムが 4 冊，1975 年のアルバムが 1 冊，1977 年のアルバムが 10 冊，1984 年のアルバムが 1 冊である。これらの写真アルバムの作成者は，岡自身，あるいはご家族の方だと思われる。なお，貸出中により写真 1 に含まれていないアルバムが 2 冊ある（1975 年 1 冊，1977 年 1 冊）。また，使用した資料のなかには，一部，明治大学大学史資料センターのものでないものが含まれている。それらは，筆者のうちのひとりが，岡千曲から譲り受けたものである（写真 2・3）。

5）「年譜」には 1973 年の渡航についての記載はないが，写真アルバムには 1973 年のアルバムが含まれているため，表にも含めた。

6）　馬場脩（1892–1979）は，米国留学後東京で歯科医として開業するが，1930 年に廃業して，北方考古学に専念した人物である。岡との関連ではこの北千島・樺太調査においてしか登場していない。ロシアや米国の研究をも渉猟しつつ，千島・樺太の先史学的調査を行い，イギリス王立人類学会誌に投稿，翻訳本を出版するなど，野にありながら研究活動の幅は広かった。一方で，消えゆくアイヌの民俗資料の収集に努め，彼が収集した樺太アイヌ資料や樺太・千島出土の考古資料は後に「馬場コレクション」と呼ばれ，特異な経歴とともに異彩を放っている（長谷部 2000）。

7）　本国際会議の発表要旨（Oka 1939）には，岡の発表「北千島文化の問題」に対してデ・ラグーナのコメントが載せられている。「千島で発掘調査した竪穴や貝塚が古い時期のものではないことから，千島がアメリカへのひとつの移動ルートであるとみなす仮説を維持することは不可能である」との岡の結論に対して，デ・ラグーナは，この発表に敬意を表しつつ，しかし，従来日本の研究者が日本語でしか発表していないことに苦言を呈しながら，是非，詳細な論考を期待する旨，コメントしている。しかし，間もなく世界情勢は厳しさを増し，岡は北千島の先史学的調査結果を外国語論文として発表することはなかった。なお，この北千島調査時の写真は，1997 年にクライナーから北海道立北方民族博物館に寄贈され，2018 年に「資料目録」としてまとめられている（北海道立北方民族博物館編 2018a）。

8）　発表要旨によれば，民族学的研究には社会構造の解明が必要であるにもかかわらず，従来のアイヌ研究にはそのアプローチが欠如していたとし，調査結果に基づいて，母系リニージが存在していた可能性がある一方，父系リニージが存在していた可能性が低いことを指摘した。さらに，日本民族＝文化への北からの文化の流れに関連し，日本の石器時代のある要素がシベリアの石器時代の文化と関係があるとの認識から，アイヌ文化とその起源に関する調査がさらに進めば，アイヌと日本の先史文化との関係が明らかになっていくかもしれないと述べている（Oka 1955）。

9）　北千島の報告論文（岡・馬場 1938）と同様に，計画書には「本調査計画は今回のみで終了するものではなく，少なくとも 3 年間継続調査を行い，初期の目的を達成したいと考えている」と述べられており，予め将来的な支援を期待したものであったのかもしれない。

10）　第二次調査は岡団長の下，蒲生，岡田宏明がメンバーであり，祖父江は参加していない。その理由について祖父江は，その頃から日本人の県民性に関心をもつようになったからだと述べている（祖父江 2013: 42）。逆に蒲生が第一次調査に参加していないのは，1958 年 9 月から 1 年間，ブリティッシュ・コロンビア大学に滞在していたからであろう。なお，岡田は第一次調査の計画段階では民族学班のメンバーであったが，英語が堪能なことから，ウィスコンシン大学との共同調査を行った考古学班に通訳兼務で参加することになったといわれる（岡田 2007; 明治大学 1959）。しかし第二次調査以降は，蒲生とともに民族学班の調査に参加している。

11）　後に，1970 年代の南西アラスカを調査した岡田淳子は，孤立により内婚傾向が進んだわけではなく，貨幣経済の浸透によっても生業と生活の方法が大きく変わっていないことを指

摘しつつ，それ以外は彼女の実見した経験と大差はなく，岡の予想はほとんど当たっていたという（岡田 2010: 9）。

12）　アラスカに渡った中国古代文化の断片のひとつとして，いわゆる「かぐや姫」伝説の存在に注目したのは，岡千曲である（岡 2016）。

13）　岡が，南西アラスカ・ネルソン島の調査で，その文化の複雑性や「カズギ」とよばれる「男宿」の存在と仮面者訪来の習俗を見出しながら，その後，ネルソン島を訪問しなかった理由は不明である。岡らがネルソン島でも優れたインフォーマントに出会っていることを考えるとなおさらである。後に岡田宏明，岡田淳子らとともにネルソン島での調査を継続した蒲生は，亡くなる直前に次のように述べている。

「…その名をフランク・アマディウスと言ったが，…無文字社会の伝統を一身に背負ってきたかのごとき，たぐい稀な豊かな知識，記憶力，そして表現力であった。いつ，どこで，なにを聞いても，そして時には同じことを繰りかえし質問しても，淡々とそして整然と答えが帰ってきた。私は恐るべき一人の人間と遭遇したのではないかと思う」（蒲生 1981: 24）。

14）　大貫によれば，家屋はケチカン北部のマッドバイトのものを，トーテムポールはヘインズで製作したのでヘインズのものをモデルとしていたものであろうという。リトルワールドの展示家屋を確認すると，北西海岸先住民であるトリンギットの家屋は，塗り替えこそすれ，現在も建設当時のまま健在である。トーテムポールと家屋をどのように製作して日本に輸送すべきか，現地の関係者との調整状況について，大貫が岡に報告した手紙が幾つか残されている。大貫はリトルワールド勤務 8 年の間，このようにして世界の諸民族の家屋などを設置するため，フィールドワークのため海外に滞在していた文化人類学者を頼って世界各地を訪問して回ったという（大貫談：2022 年 12 月 9 日）。

15）　インゴルドは，人類学的な営みは，他者を観察し分類することで他者についての知識を増やし，科学的な対象として理解することに傾きがちだが，それでは人類学の未来はないという。知識が細分化されていくばかりでは，世界の変化や動きに耐えられない。そうではなく，人類学は他者の生活に飛び込み，ともに学び世界を築いていく方向へと向かうべきだと説く（インゴルド 2020）。

参 照 文 献

〈日本語〉

飯田卓
2007 「昭和 30 年代の海外学術エクスペディション――『日本の人類学』の戦後とマスメディア」『国立民族学博物館研究報告』31(2): 227–285。

インゴルド，T.
2020 『人類学とは何か』奥野克巳・宮崎幸子訳，東京：亜紀書房。

上野和男
1982 「蒲生正男先生年譜」明治大学政治経済研究所編『政経論叢』50(5・6): 445–450。

大林太良
1991 「人と学問――民族学者 岡正雄」『社会人類学年報』17: 103–114。
1994 「解説」大林太良編『岡正雄論文集――異人その他 他十二篇』pp. 267–277，東京：岩波書店。

岡千曲
2007 「岡正雄とアラスカ調査」岡田淳子・渡部裕・岡庭義行編『アラスカ遠征のパイオニア』pp. 14–19，網走：「アラスカ遠征のパイオニア」編集委員会。
2016 「かぐや姫北へ」『北のオントロギー』pp. 111–128，東京：国書刊行会（初出は 2000 年）。

岡正雄
1928 「異人その他」『民族』3(6): 1069–1109。
1961a「アラスカ・内陸エスキモー社会の変動」『人類科学』14: 106–116。

1961b「北西インディアン――未開民族の“高文化”」渡辺操・岡正雄・杉原荘介編『アラスカ――明治大学アラスカ学術調査団』pp. 121–129，東京：古今書院。
1961c「アラスカのエスキモー」渡辺操・岡正雄・杉原荘介編『アラスカ――明治大学アラスカ学術調査団』pp. 133–159，東京：古今書院。
1961d「北アラスカのエスキモー」渡辺操・岡正雄・杉原荘介編『アラスカ――明治大学アラスカ学術調査団』pp. 160–194，東京：古今書院。
1962a「極北における《古代文化》の断片」『世界考古学大系 月報 14』pp.1–4，東京：平凡社。
1962b「アラスカの風物」（7 月 1 日，8 日，15 日，22 日，29 日），「エスキモーの生活と社会」（8 月 28 日）『中部日本新聞』。
1973 「エスキモーの村・下」（10 月 9 日，夕刊）『中日新聞』。
1979a「サイモン・パニアックの一生――内陸エスキモーの人生」『季刊どるめん』21: 5–30。
1979b「岡正雄年譜」『異人その他――日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』pp. 481–489，東京：言叢社。
1979c「日本文化の基礎構造」『異人その他――日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』pp. 18–36，東京：言叢社（初出は 1958 年）。
1979d「民族学との出会い」『異人その他――日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』pp. 395–412，東京：言叢社（初出は 1978 年）。

岡正雄・馬場脩
1938 「第一回日本民族學會北方文化調査團報告――北千島占守島及び樺太多來加地方に於ける考古學的調査豫報」『民族學研究』4(3): 117–180。

岡田淳子
2007 「岡田宏明の北方研究――アラスカのフィールドワークを中心に」岡田淳子・渡部裕・岡庭義行編『アラスカ遠征のパイオニア』pp. 125–131，網走：「アラスカ遠征のパイオニア」編集委員会。
2010 「岡正雄先生の北方研究――その軌跡と業績」『北海道立北方民族博物館研究紀要』19: 1–13。
2013 「岡正雄の北方研究――アイヌとアラスカ・エスキモー（イヌイト）」J. クライナー編『日本民族学の戦前と戦後――岡正雄と日本民族学の草分け』pp. 43–59，東京：東京堂出版。

岡田淳子・渡部裕・岡庭義行編
2007 『アラスカ遠征のパイオニア』網走：「アラスカ遠征のパイオニア」編集委員会。

岡田宏明
1983 「エスキモー研究」『民族學研究』（岡正雄教授追悼特集）48(1): 25–26。

蒲生正男
1964 「アラスカ・エスキモーにおけるバンドの構造原理」『民族學研究』28(2): 149–180。
1965 「アラスカ・エスキモーの親族名称体系」『民族學研究』29(3): 283–296。
1979 「エスキモーの友人たち」渡部雄吉著『アラスカ エスキモー』（ソノラマ写真選書 20）pp. 114–116，東京：朝日ソノラマ。
1981 「アラスカ・エスキモーの旅から」『書斎の窓』302: 23–26，東京：有斐閣。

クライナー，J.
1979 「岡先生とヴィーン――学説の裏付け」岡正雄著『異人その他――日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』pp. 453–480，東京：言叢社。
2013 「岡正雄――その人と業績」J. クライナー編『日本民族学の戦前と戦後――岡正雄と日本民族学の草分け』pp. 2–27，東京：東京堂出版。
2021 「徳内・シーボルトとヨーロッパのアイヌ研究」『村山市歴史文化基本構想記念シンポジウム講演録報告書』pp. 35–59，村山：山形県村山市。

小谷凱宣
2007 「岡田宏明氏とチェスター・S・チャード氏――1960 年前後のアラスカ考古学とその後」岡田淳子・渡部裕・岡庭義行編『アラスカ遠征のパイオニア』pp. 22–34，網走：「アラスカ遠征のパイオニア」編集委員会。

清水昭俊
2013 「異人，現在学的民族学，そして種族史的形成――岡正雄と日本民族学の展開」J. クライナー編『日本民族学の戦前と戦後――岡正雄と日本民族学の草分け』pp. 67–142，

東京：東京堂出版。
2020 「岡正雄 想外の挑戦──戦地の民族政策と民族研究所設立運動」清水展・飯嶋秀治編『自前の思想──時代と社会に応答するフールドワーク』pp. 379–416，京都：京都大学学術出版会。
白鳥芳郎
1983 「岡正雄先生追憶の記」『民族學研究』（岡正雄教授追悼特集）48(1): 4–7。
住谷一彦
1979 「岡正雄『古日本の文化層』──或る素描」岡正雄著『異人その他──日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』pp. 432–452，東京：言叢社。
1988 「岡正雄──日本における民族学の歴史の体現者」綾部恒雄編『文化人類学群像 3〈日本編〉』pp. 273–292，京都：アカデミア出版会。
住谷一彦・坪井洋文・山口昌男・村武精一
1984 「『異人その他』を読む」『無限大』65: 5–43，東京：日本 IBM。
祖父江孝男
1961 『エスキモー人──日本人の郷愁をさそう北方民族』東京：光文社。
2013 「共に過ごした楽しい思い出──アラスカ・エスキモーの調査その他」J. クライナー編『日本民族学の戦前と戦後──岡正雄と日本民族学の草分け』pp. 36–42，東京：東京堂出版。
1988 「岡先生の思い出」『信州白樺』67: 173–180。
中生勝美
1997 「民族研究所の組織と活動──戦争中の日本民族学」『民族学研究』62(1): 47–65。
2013 「戦時中の日本民族学──岡正雄の民族研究所」J. クライナー編『日本民族学の戦前と戦後──岡正雄と日本民族学の草分け』pp. 143–174，東京：東京堂出版。
2018 「岡正雄」岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学──人物・古典・名著からの誘い』pp. 58–59，京都：ミネルヴァ書房。
西村朝日太郎
1988 「日本民族学のプロモーター──岡正雄とかれを廻る人びと」『信州白樺』67: 162–172。
日本民族学会編
1983 「岡正雄教授追悼特集」『民族學研究』48(1): 1–29。
長谷部一弘
2000 「北方文化と二つのコレクション──馬場コレクション・児玉コレクションについて」財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編『馬場・児玉コレクションにみる北の民アイヌの世界』pp. 121–129，札幌：財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
馬場脩
1979 「樺太の考古學的概観」『樺太・千島考古・民族誌 3』pp. 9–127，札幌：北海道出版企画センター（初出は 1940 年『人類学・先史学講座 17』）。
北海道立北方民族博物館編
2013 『明治大学政治経済学部寄贈資料目録』（北海道立北方民族博物館資料目録 9）網走：北海道立北方民族博物館。
2018a『岡正雄・馬場脩千島・樺太アルバム』（北海道立北方民族博物館資料目録 13）網走：北海道立北方民族博物館。
2018b『North to the Future──日本人が出会ったアラスカ』網走：北海道立北方民族博物館。
マードック，G. P.
1978 『社会構造──核家族の社会人類学』内藤莞爾監訳，東京：新泉社。
宮岡伯人
1987 『エスキモー──極北の文化誌』東京：岩波書店。
明治大学
1959 『明治大学創立 80 周年記念事業アラスカ地域総合学術調査計画書』アラスカ学術調査企画委員会。
1960a『明治大学創立 80 周年記念アラスカ地域学術調査計画概要』アラスカ学術調査企画委員会。
1960b『創立 80 周年記念アラスカ学術調査団報告書』アラスカ学術調査企画委員会。
1961 『アラスカ第二次学術調査計画書』アラスカ学術調査企画委員会。

1962 『明治大学第二次アラスカ学術調査団報告』アラスカ学術調査企画委員会。
1966 『明治大学第三次「アラスカ学術調査」計画書』
吉田泰幸
2023 「考古学・人類学の関係史と『土偶を読む』」望月昭秀編『土偶を読むを読む』縄文ZINE編，pp. 365–384，東京：文学通信。
渡辺操・岡正雄・杉原荘介編
1961 『アラスカ――明治大学アラスカ学術調査団』東京：古今書院。
渡部雄吉
1979 『アラスカ エスキモー』（ソノラマ写真選書 20）東京：朝日ソノラマ。

〈外国語〉

Ingstad, H.
1954 *Nunamiut: Among Alaska's Inland Eskimos*. New York: W.W. Norton.（初出は 1951 年）。
Kreiner, J.
2016 Oka Masao: The Man and His Footprints in Japanese Ethnology and Viennese Japanology. In H. Ishikawa, J. Kreiner, K. Sasaki, and T. Yoshimura (eds.) *Origins of Oka Masao's Anthropological Scholarship*, pp. 3–42. Bonn: Bier'sche Verlagsanstalt.
Oka, M.
1939 Das Problem Der Kultur Der Nord-Chishima (Kurilen). *Congrès International Des Sciences Anthropologiques et Ethnologiques*, pp. 300–301. Copenhague: Einar Munksgaard.
1955 Das Verwandtschaftssystem der Ainu. *Actes Du IVe Congrès International Des Sciences Anthropologiques et Ethnologiques*, pp. 207–210. Wien : Verlag Adolf Holzhausens Nfg.